

令和5年度

植物防疫年報

福岡県農林業総合試験場病害虫部予察課
(福岡県病害虫防除所)

目 次

第1	福岡県農林業総合試験場病害虫部予察課（病害虫防除所）の概要	
I	沿革	1
II	所在地	1
III	管轄区域	1
IV	業務体制	
1	組織体制	2
2	業務内容	2
3	病害虫防除員の設置	3
第2	業務実績	
I	病害虫発生予察	
1	発生予察調査	
(1)	対象病害虫	4
(2)	調査の種類及び調査地点	6
2	気象概況	
(1)	気象概況	7
(2)	気象図	1 1
3	農作物の生育概況	
(1)	普通作物	1 2
(2)	果樹	1 2
(3)	野菜	1 3
(4)	特用作物	1 4
4	主要病害虫の発生及び防除状況	
(1)	主要病害虫の発生経過、発生原因及び防除の概要	1 5
(2)	主要病害虫の発生面積及び防除面積	3 8
II	情報の提供実績	
1	情報の種類と発表回数	
(1)	情報の種類	4 0
(2)	発表回数	4 0
2	情報の発表状況	
(1)	発生予報	4 1
(2)	注意報	4 2
(3)	特殊報	4 2
(4)	速報	4 2
(5)	技術情報	4 2
3	情報の提供先	4 3
4	情報の概要	
(1)	注意報	4 4
(2)	特殊報	4 6

Ⅲ 国内検疫事業

1 侵入調査事業

(1) ミカンコミバエ種群、ウリミバエ、クインスランドミバエ、チチュウウカイミバエ	5 2
(2) コドリングア	5 3
(3) トマトキバガ	5 4
(4) <i>Meloidogyne enterolobii</i> 、columnnea latent viroid (CLVd)、pepper chat fruit viroid (PCFVd)、トマト退緑萎縮ウイルス (TCDVd)、tomato apical stunt viroid (TASVd)、pepino mosaic virus (PepMV)、tomato brown rugose fruit virus (ToBRFV)、tomato leaf curl New Delhi virus (ToLCNDV)、バナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、ジャガイモやせいもウイルス (PSTVd)、カンキツネモグリセンチュウ、tomato mottle mosaic virus (ToMMV)	5 5
(5) 火傷病菌	5 5
(6) カンキツグリーンング病、 <i>Spiroplasma citri</i> 、 <i>Xylella fastidiosa</i>	5 6
(7) イネミイラ穂病菌、イネ条斑細菌病菌、イネクキセンチュウ	5 6
(8) テンサイシストセンチュウ	5 7
(9) ヘシアンバエ、 <i>Ramularia collo-cygni</i>	5 7
(10) スイカ果実汚斑細菌病	5 7
(11) インゲンマメ萎凋細菌病	5 8
(12) ウメ輪紋ウイルス	5 8

Ⅳ 病虫害防除対策

1 問題となっている病虫害に関する調査

(1) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫検定	5 9
(2) 大豆におけるハスモンヨトウの薬剤感受性検定	6 0
(3) キウイフルーツかいよう病 Psa 3 系統発生拡大への対応	6 0
(4) かんきつミカンハダニの薬剤感受性検定	6 1
(5) イチゴ炭疽病潜在感染株 (親株) 調査	6 2
(6) トマトにおけるタバココナジラミの薬剤感受性検定	6 2

2 病虫害診断

普及指導センター等からの作物別依頼件数と診断結果	6 4
--------------------------	-----

第1 福岡県農林業総合試験場病害虫部予察課（病害虫防除所）の概要

I 沿革

- 昭和16年（1941年） 病害虫発生予察事業が始まる
農事試験場を中核として、県内7か所に観測所を設置
- 昭和22年（1947年） 観測所を県下6か所とし、観察員を各1名配置
- 昭和27年（1952年） 本庁及び地方事務所に17か所の病害虫防除所を並置
- 昭和30年（1955年） 地方事務所の廃止に伴い、病害虫防除所を農林事務所、農業改良普及所に移転
- 昭和45年（1970年） 病害虫防除所を各農林事務所6か所に統合
- 平成元年（1989年） 6か所の病害虫防除所を本所及び2支所（筑後、行橋）に統合
- 平成18年（2006年） 残留農薬分析室を整備
- 平成26年（2014年） 組織再編に伴い農林業総合試験場 病害虫部予察課として配置

II 所在地

農林業総合試験場 病害虫部予察課
〒818-8549 筑紫野市大字吉木 587
TEL (092) 924-0062 FAX (092) 928-6404

III 管轄区域

管 轄 区 域	市町村数	農協数
【福岡農林管内】 福岡市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、志免町、須恵町、新宮町、久山町、粕屋町 【朝倉農林管内】 久留米市、小郡市、うきは市、朝倉市、筑前町、東峰村、大刀洗町 【飯塚農林管内】 直方市、飯塚市、田川市、宮若市、嘉麻市、小竹町、鞍手町、桂川町、香春町、添田町、糸田町、川崎町、大任町、赤村、福智町 【筑後農林管内】 大牟田市、柳川市、八女市、筑後市、大川市、みやま市、大木町、広川町 【八幡農林管内】 北九州市、中間市、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町 【行橋農林管内】 行橋市、豊前市、荻田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町	60	20

IV 業務体制

1 組織体制

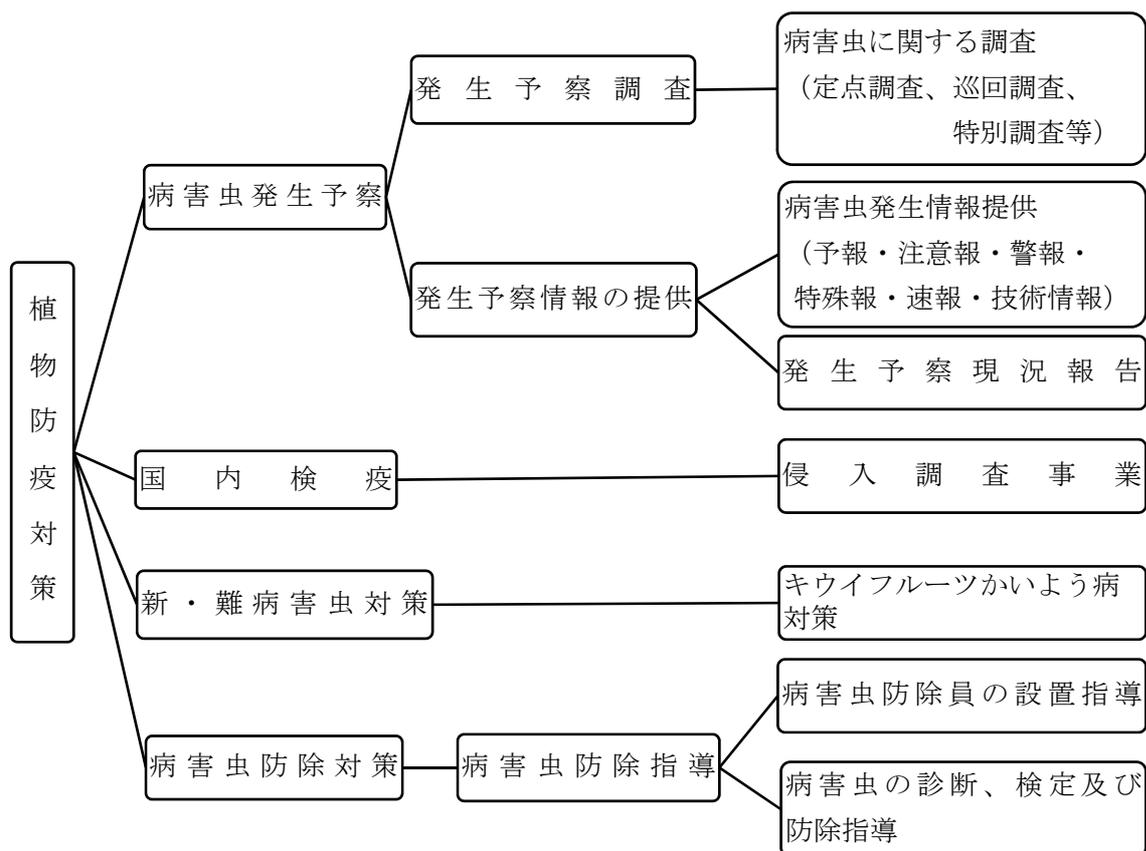
病虫害部

予察課

部長： 松本 幸子 (8名) 課長： 東 勇司
(所長兼務)

副 長： 成山 秀樹
企画主査： 末信 真二
技術主査： 樋口 佳代
技術主査： 土谷 俊弘
技術主査： 吉永 文浩
技 師： 海口 直弥
技 師： 尾崎 友輔

2 業務内容



3 病虫害防除員の設置

植物防疫の施設に関する条例（昭和27年7月31日条例第42号）及び福岡県病虫害防除員の任用、勤務条件等に関する要綱（令和3年4月1日施行）に基づき、農作物の栽培面積や病虫害の発生動向等を考慮し、20名の病虫害防除員（普通作物6名、果樹9名、野菜3名、特用作物2名）を設置した。

防除員の管轄は市町村区域とし、発生予察調査及び防除指導等を行った。

病虫害防除員活動実績一覧

担当作物	担当市町	活動日数			
		病虫害調査日数 (日/人)	防除指導日数 (日/人)	人数	
普通作物	水稲+大麦	築上町	11	2	1
	水稲+小麦+大豆	宮若市	17	2	2
		大川市			
	水稲+大麦+小麦+大豆	久留米市	18	2	1
	水稲+大豆	みやま市	13	1	1
上毛町		13	2	1	
(小計)				(6)	
果樹	カキ	うきは市	13	2	2
		朝倉市			
	カンキツ	宗像市	14	2	2
		八女市			
		みやま市			
	ナシ	朝倉市	10	2	1
		筑後市	11	2	3
行橋市					
嘉麻市					
(小計)				(9)	
野菜	イチゴ	宗像市	10	2	2
		嘉麻市			
	冬春ナス	みやま市	7	2	1
(小計)				(3)	
特用作物	茶	八女市	8	2	2
合計			7~18日/人	1~2日/人	20

第2 業務実績

I 病虫害発生予察

1 発生予察調査

(1) 対象病虫害

ア 指定病虫害

国内における病虫害の発生が局地的でなく、かつ、急激にまん延して農作物に重大な損害を与える傾向があるため、特別の対策を要するものとして農林水産大臣が指定するもの。

イ 指定外病虫害

指定病虫害以外の有害動植物について重要な病虫害として知事が定めるもの。

調査対象病虫害一覧

	農作物名	指定病虫害名	指定外病虫害名
普通作物	水稲 (普通期)	いもち病、ばか苗病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯病、紋枯病、稲こうじ病、縞葉枯病、白葉枯病、トビイロウンカ、セジロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、コブノメイガ、斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシ、イネカメムシ、アカスジカスミカメ）、スクミリンゴガイ、イネミズゾウムシ、フタオビコヤガ、ニカメイガ、イネドロオイムシ	心枯線虫病、イネクロカメムシ
	水稲 (早期)	トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、セジロウンカ、ツマグロヨコバイ	—
	大麦	赤かび病、さび病類、うどんこ病	縞萎縮病、斑葉病、網斑病、黒穂病類
	小麦	赤かび病、さび病類、うどんこ病	縞萎縮病、黒穂病類、コムギ黄斑病、シロトビムシ類
	大豆	紫斑病、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類（アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタスジヒメハムシ、マメシンクイガ	葉焼病、べと病、さび病
果樹	かき	炭疽病、カキクダアザミウマ、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類、カキノヘタムシガ	—
	かんきつ	かいよう病、そうか病、黒点病、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマ、アブラムシ類	—
	ぶどう	灰色かび病、べと病、晩腐病、アザミウマ類	黒とう病、褐斑病

	農作物名	指定病害虫名	指定外病害虫名
果 樹	なし	黒星病、黒斑病、赤星病、ハダニ類、カイガラムシ類、アブラムシ類、シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、ハマキムシ類	—
	キウイ フルーツ	かいよう病	—
野 菜	冬春イチゴ	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、アザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ類、コナジラミ類	萎黄病、菌核病、チョウ目
	冬春トマト	灰色かび病、葉かび病、疫病、すすかび病、うどんこ病、黄化葉巻病、コナジラミ類、アブラムシ類、アザミウマ類	ハモグリバエ類
	冬春ナス	灰色かび病、うどんこ病、すすかび病、アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ）、アブラムシ類、ハダニ類	コナジラミ類、ハモグリバエ類
	冬レタス	灰色かび病、菌核病、アブラムシ類	—
	冬キャベツ	黒腐病、菌核病、アブラムシ類、モンシロチョウ	軟腐病、べと病、ウワバ類
特 用 作 物	茶	炭疽病、ハダニ類（カンザワハダニ）、チャノキイロアザミウマ、チャトゲコナジラミ、クワシロカイガラムシ、チャノミドリヒメヨコバイ、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、チャノホソガ	もち病
作 物 共 通	—	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナガ、シロイチモジヨトウ、果樹カメムシ類	—

(2) 調査の種類及び調査地点

病害虫発生予察に係る調査は、定点調査・巡回調査及び特別調査とした。

調査場所は気候、栽培品種、作型等の栽培方法及び市町村・農協の管轄区域等を考慮し、農作物の主要な栽培地帯を中心に、農作物の種類ごとに設置した。

発生予察に係る調査地点数一覧

(単位:地点)

作物部門	農作物名	区分	予察調査ほ		防除適期決定ほ等	
			病害虫部予察課等	防除員	予察灯	フェロモントラップ
普通作	水稲	定点	予察灯 1 (筑紫野市)		<ウンカ等> 4 (糸島市、遠賀町、大木町、 行橋市)	<コブノメイガ> 1 (筑紫野市)
		巡回	44	6		
		特別	ウンカ類飛来状況調査 3 保毒虫検定 14			
	大麦	巡回	11	2		
	小麦	巡回	14	3		
	大豆	巡回	12	5		
果樹	かき	巡回	9	2		
	かんきつ	巡回	8	3		
	ぶどう	巡回	3			
	なし	巡回	7	4		
		特別	中間寄主<赤星病> 3			
キウイフルーツ	特別	2				
野菜	イチゴ	巡回	育苗期・本ぼ 12	2		
		特別	親株 12			
	冬春トマト	巡回	6			
	冬春ナス	巡回	6	1		
	冬レタス	巡回	4			
	冬キャベツ	巡回	7			
野菜共通	定点		黄色粘着板トラップ <コナジラミ類> 3 (筑紫野市、筑後市、うきは市)			<オオタバコガ> 5 (大刀洗町、みやま市、 広川町、北九州市、福岡市)
特用作物	茶	巡回	8	2		
		定点				<ハマキムシ類> 2 (うきは市、八女市)
作物共通	定点		フェロモントラップ <ハスモンヨトウ> 1 (筑紫野市)			<ハスモンヨトウ> 2 (筑後市、行橋市)
			予察灯 <果樹カメムシ類> 2 (筑紫野市、八女市)		<果樹カメムシ類> 4 (久留米市、うきは市、 朝倉市、飯塚市)	<チャハ ^ハ ネオカメムシ ^シ ・ハマキムシ ^シ 類 ^シ ・シク ムシ ^シ 類> 9 (宗像市、うきは市 3、 朝倉市 2、八女市 3)
			フェロモントラップ <果樹カメムシ類> 1 (筑紫野市)			
		特別	越冬密度 <チャバネアオカメムシ> 30 餌作物着生量調査 <ヒノキ球果> 46 ピーティング調査 <ヒノキ球果> 12 口針軸数調査 <ヒノキ球果> 12			
合計		定点	8カ所	0カ所	8カ所	19カ所
		巡回	151カ所	30カ所	0カ所	0カ所
		特別	134カ所	0カ所	0カ所	0カ所

2 気象概況

(1) 気象概況(福岡 令和5年4月～令和6年3月)

月	旬	上旬			中旬			下旬		
		平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
4月		<p>期間の初めは高気圧に覆われて晴れたが、4日は気圧の谷の影響で曇りとなり、5日から7日にかけては前線の影響で雨が降った。8日以降は高気圧に覆われて晴れた。 気温は平年より高く、旬平均気温は13.5～15.7℃(平年差 1.4～2.1℃)となった。 降水量は平年並で、旬降水量は6.0～55.0mm(平年比 53～109%)となった。 日照時間は平年より多く、旬日照時間は平年比 120～136%となった。</p>			<p>期間の前半は低気圧や前線の影響で雨の降った日が多く、期間の後半は高気圧に覆われて晴れた日が多かった。16日は上空に強い寒気が流れ込み、大気の状態が非常に不安定となり雷を観測した。 気温は平年より高く、旬平均気温は15.7～17.9℃(平年差 1.7～2.8℃)となった。 降水量は概ね平年より多く、旬降水量は40.5～87.5mm(平年比 70～189%)となった。 日照時間は平年並で、旬日照時間は平年比 97～110%となった。</p>			<p>天気は数日の周期で変化し、24日から26日は低気圧が、29日は前線が九州を通過した影響で雨が降った。 気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は14.5～16.6℃(平年差 -0.9～0.0℃)となった。 降水量は平年より多く、旬降水量は58.5～142.0mm(平年比 138～219%)となった。 日照時間は概ね平年並で、旬日照時間は平年比 88～99%となった。</p>		
		高い	並	多い	かなり高い	多い	並	並	かなり多い	並
5月		<p>期間のはじめと終わりは高気圧に覆われて晴れ、6日は前線が九州北岸に停滞し、7日は低気圧が九州を通過した影響で大雨となった。 気温は概ね平年より低く、旬平均気温は16.8～18.3℃(平年差 -1.1～-0.4℃)となった。 降水量は平年よりかなり多く、旬降水量は58.0～230.0mm(平年比 207～475%)となった。 日照時間は平年並か平年より多く、旬日照時間は平年比 102～112%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、13日と18日から19日に低気圧が九州付近を通過した影響で雨が降った。 気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は18.6～20.5℃(平年差 0.2～1.0℃)となった。 降水量は平年並か平年より少なく、旬降水量は26.5～61.5mm(平年比 44～111%)となった。 日照時間は概ね平年並で、旬日照時間は平年比 101～120%となった。</p>			<p>期間の前半は高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、29日からは梅雨前線の影響で雨が降った。 気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は20.2～22.5℃(平年差 0.2～1.2℃)となった。 降水量は平年より多いかかなり多く、旬降水量は40.5～102.0mm(平年比 151～648%)となった。 日照時間は概ね平年より少なく、旬日照時間は平年比 77～87%となった。</p>		
		低い	かなり多い	並	高い	並	並	並	かなり多い	少ない
6月		<p>高気圧に覆われて晴れた日もあったが、梅雨前線や低気圧の影響で曇りや雨の日が多く、8日はまとまった雨となったところもあった。 気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は20.3～22.2℃(平年差 -0.7～0.2℃)となった。 降水量は概ね平年より多く、旬降水量は35.0～147.0mm(平年比 99～300%)となった。 日照時間は平年並か平年より少なく、旬日照時間は平年比 66～86%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、11日や18日は梅雨前線の影響で曇りや雨となり、上空の寒気の影響などで大気の状態が不安定となった13日から15日には、局的にまとまった雨となったところもあった。 気温は平年より高く、旬平均気温は22.8～25.3℃(平年差 0.6～1.7℃)となった。 降水量は平年よりかなり少なく、旬降水量は0.0～23.5mm(平年比 0～31%)となった。 日照時間は平年より多く、旬日照時間は平年比128～151%となった。</p>			<p>期間のはじめは高気圧に覆われて晴れた日もあったが、梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多く、30日は梅雨前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだため大雨となった。 気温は平年より高く、旬平均気温は24.2～26.2℃(平年差 0.9～1.9℃)となった。 降水量は概ね平年より多く、旬降水量は106.0～415.0mm(平年比 86～210%)となった。 日照時間は平年並か平年より少なく、旬日照時間は平年比34～81%となった。</p>		
		並	多い	少ない	高い	かなり少ない	多い	かなり高い	並	並

旬 月	上旬			中旬			下旬		
	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
7月	<p>期間の中頃は高気圧に覆われて晴れた日もあったが、梅雨前線や湿った空気の影響で雨の日が多かった。6月30日から3日、7日から10日にかけては梅雨前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだため各地で大雨となり、特に10日は明け方から朝にかけて線状降水帯が発生し非常に激しい雨が同じ場所で降り続いた。</p> <p>気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は25.2～27.1℃(平年差 0.4～1.4℃)となった。</p> <p>降水量は概ね平年よりかなり多く、旬降水量は238.0～845.0mm(平年比 184～403%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より少なく、旬日照時間は平年比37～90%となった。</p>			<p>11日と期間の後半に高気圧に覆われて晴れた日もあったが、梅雨前線や湿った空気の影響で曇りの日が多く雨の日もあった。</p> <p>気温は平年より高く、旬平均気温は27.4～29.8℃(平年差 1.2～2.6℃)となった。</p> <p>降水量は概ね平年並か平年より少なく、旬降水量は5.0～149.0mm(平年比 5～119%)となった。</p> <p>日照時間は平年並で、旬日照時間は平年比87～111%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、強い日射や上空の寒気の影響で局所的に雷雨となった。</p> <p>気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は27.0～29.6℃(平年差 0.1～1.2℃)となった。</p> <p>降水量は概ね平年並で、旬降水量は0.5～73.5mm(平年比 1～123%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より多く、旬日照時間は平年比95～132%となった。</p>		
	高い	かなり多い	並	かなり高い	少ない	並	かなり高い	並	並
8月	<p>期間の前半は高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、強い日射や上空の寒気の影響で局所的に雷雨となった。7日からは台風第6号の影響を受けた。</p> <p>気温は平年よりかなり高いか高く、旬平均気温は28.3～30.9℃(平年差 0.7～2.3℃)となった。</p> <p>降水量は平年より多いか平年並で、旬降水量は22.5～179.0mm(平年比 45～319%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より少なく、旬日照時間は平年比 83～108%となった。</p>			<p>期間の前半と終わりは、高気圧に覆われて晴れたが、湿った空気や強い日射の影響を受けて雨や雷雨となった所があった。15日は兵庫県に上陸した台風第7号の影響を受け、17日～18は低気圧の影響を受け曇りや雨となった。</p> <p>気温は概ね平年並で、旬平均気温は27.1～29.1℃(平年差 -0.3～0.7℃)となった。</p> <p>降水量は平年並か平年より少なく、旬降水量は5.0～67.5mm(平年比 8～122%)となった。</p> <p>日照時間は概ね平年並で、旬日照時間は平年比 80～117%となった。</p>			<p>期間の始めと後半は、高気圧に覆われて晴れたが、湿った空気や強い日射の影響を受けて雨や雷雨となった所があった。23日から25日と31日は気圧の谷や低気圧からの湿った空気の影響をうけて曇りや雨となった。</p> <p>気温は平年より高いかかなり高く、旬平均気温は27.0～29.7℃(平年差 1.0～2.3℃)となった。</p> <p>降水量は概ね平年並か平年より少なく、旬降水量は6.0～77.0mm(平年比 8～88%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より多く、旬日照時間は平年比 98～132%となった。</p>		
	かなり高い	多い	並	並	少ない	並	高い	少ない	多い
9月	<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、1日と6日は前線の影響で、5日は台風第12号から変わった熱帯低気圧の影響で雨が降った。10日は上空の寒気や強い日射の影響で雷雨となった。</p> <p>気温は概ね平年より高く、旬平均気温は25.3～27.5℃(平年差 0.6～1.4℃)となった。</p> <p>降水量は概ね平年より少なく、旬降水量は5.0～94.5mm(平年比 7～134%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より多く、旬日照時間は平年比 100～120%となった。</p>			<p>期間のはじめと16日は高気圧に覆われて晴れたが、14日から15日と17日から18日は九州の北にある停滞前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で雨が降り、大雨となった所があった。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は25.6～27.5℃(平年差 2.2～3.0℃)となった。</p> <p>降水量は概ね平年並で、旬降水量は14.5～211.5mm(平年比 20～238%)となった。</p> <p>日照時間は平年より少なく、旬日照時間は平年比 59～83%となった。</p>			<p>天気は数日の周期で変化し、21～22日、26日、30日は前線や気圧の谷、湿った空気の影響で雨が降った。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は23.8～26.0℃(平年差 2.2～3.3℃)となった。</p> <p>降水量は概ね平年より少なく、旬降水量は3.5～44.0mm(平年比 9～86%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より多く、旬日照時間は平年比 105～127%となった。</p>		
	高い	並	多い	かなり高い	多い	並	かなり高い	少ない	多い

旬 月	上旬			中旬			下旬		
	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
10月	<p>期間の前半は高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、3日は気圧の谷の影響で曇りとなった。期間の後半は曇りや雨の日が多く、8日から9日にかけては前線を伴った低気圧が九州の南を通過した影響で雨となった。</p> <p>気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は18.6～21.7℃(平年差 -1.0～0.2℃)となった。</p> <p>降水量は平年並か平年より少なく、旬降水量は2.0～29.0mm(平年比 19～105%)となった。</p> <p>日照時間は平年より少なく、旬日照時間は平年比 61～79%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、14日は気圧の谷や湿った空気の影響で曇り、20日は前線の影響で雨が降った。</p> <p>気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は17.3～20.4℃(平年差 -0.2～0.9℃)となった。</p> <p>降水量は平年並か平年より少なく、旬降水量は0.0～8.0mm(平年比 0～33%)となった。</p> <p>日照時間は平年より多く、旬日照時間は平年比 126～139%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、27日から29日にかけて寒気の影響を受けて雲が広がり雨の降った所があった。</p> <p>気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は14.3～17.9℃(平年差 -1.6～0.1℃)となった。</p> <p>降水量は平年よりかなり少なく、旬降水量は0.0～5.5mm(平年比 0～15%)となった。</p> <p>日照時間は平年よりかなり多く、旬日照時間は平年比 153～168%となった。</p>		
	並	並	少ない	並	少ない	多い	並	少ない	かなり多い
11月	<p>6日と10日は前線が九州を通過した影響で雨が降り、4日と9日は湿った空気や気圧の谷の影響で雲が広がったが、高気圧に覆われて晴れた日が多かった。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は16.6～19.5℃(平年差 2.2～3.4℃)となった。</p> <p>降水量は平年並か平年より少なく、旬降水量は7.5～32.5mm(平年比 26～89%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より多く、旬日照時間は平年比 111～128%となった。</p>			<p>期間のはじめと中頃は気圧の谷や寒気の影響で曇りや雨となった。特に17日から18日にかけては強い寒気が流れ込んだため、福岡では18日に初雪を観測した。</p> <p>気温は概ね平年より低く、旬平均気温は9.2～12.7℃(平年差 -2.3～-0.9℃)となった。</p> <p>降水量は平年並で、旬降水量は18.0～58.5mm(平年比 52～147%)となった。</p> <p>日照時間は概ね平年並で、旬日照時間は平年比 86～123%となった。</p>			<p>天気は周期的に変化した。寒気の影響を受けて曇りや雨の降った日もあったが、高気圧に覆われやすかったため晴れた日が多く、降水量はかなり少なかった。</p> <p>気温は概ね平年より高く、旬平均気温は10.6～13.1℃(平年差 0.2～0.9℃)となった。</p> <p>降水量は平年よりかなり少なく、旬降水量は0.0～4.5mm(平年比 0～17%)となった。</p> <p>日照時間は平年より多く、旬日照時間は平年比 117～141%となった。</p>		
	かなり高い	並	並	低い	並	並	高い	かなり少ない	多い
12月	<p>高気圧に覆われて日中は晴れる時間が多かったが寒気や気圧の谷の影響を受け天気は短い周期で変化し、1日は福岡であられを観測、3日と6日から7日にかけても県内各地で雨が降った。</p> <p>気温は平年より高く、旬平均気温は8.7～11.7℃(平年差 0.5～1.5℃)となった。</p> <p>降水量は平年よりかなり少なく、旬降水量は0.5～8.5mm(平年比 2～25%)となった。</p> <p>日照時間は平年よりかなり多く、旬日照時間は平年比 124～163%となった。</p>			<p>低気圧や気圧の谷の影響を受ける日が多く、曇りや雨の日が多かった。期間の後半は冬型の気圧配置となり寒気の影響を受けて気温は低くなったが、期間の中頃まで暖かい空気が流れ込んだ影響で平年よりかなり高くなった。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は9.0～11.1℃(平年差 1.8～3.6℃)となった。</p> <p>降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は14.5～66.5mm(平年比 107～313%)となった。</p> <p>日照時間は平年よりかなり少なく、旬日照時間は平年比 30～47%となった。</p>			<p>21日から22日は強い寒気の影響で雪が降り、23日から26日は気圧の谷の影響で曇りで雨の降る日もあった。期間の後半は高気圧に覆われて晴れた日が多かった。</p> <p>気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は4.3～7.2℃(平年差 -1.3～-0.3℃)となった。</p> <p>降水量は概ね平年並で、旬降水量は1.5～24.5mm(平年比 10～91%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より少なく、旬日照時間は平年比 72～98%となった。</p>		
	高い	かなり少ない	かなり多い	かなり高い	多い	かなり少ない	低い	並	並

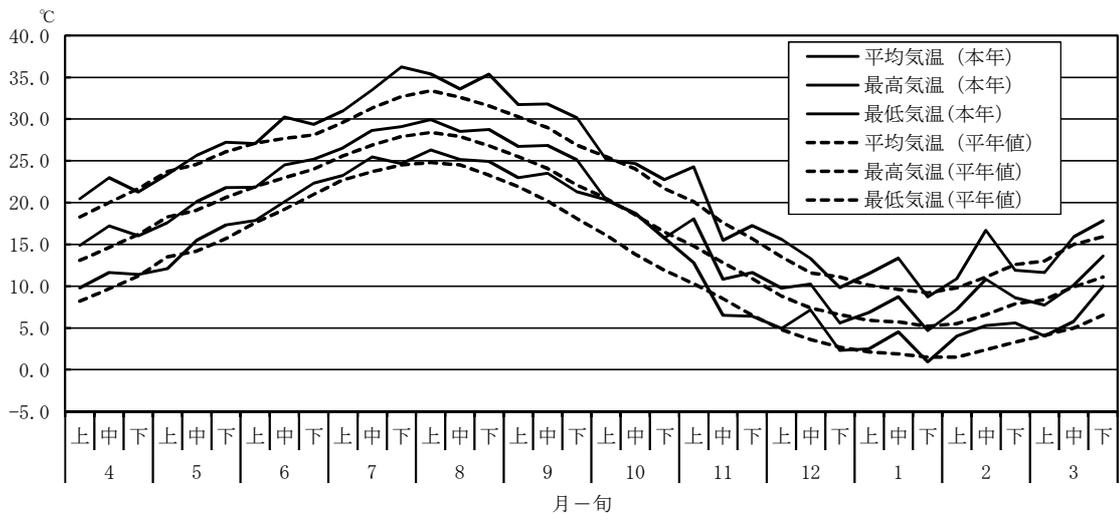
旬 月	上旬			中旬			下旬		
	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
1月	<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、寒気や気圧の谷、低気圧の影響を受けて雨の降った日も多く、天気は短い周期で変化した。 気温は概ね平年より高く、旬平均気温は5.2～8.6℃(平年差 0.6～1.5℃)となった。 降水量は概ね平年並で、旬降水量は4.5～27.0mm(平年比 27～127%)となった。 日照時間は平年並か平年より多く、旬間日照時間は平年比 102～124%となった。</p>			<p>気圧の谷や前線、低気圧の影響を受けて雨の降った日もあったが、高気圧に覆われて晴れた日が多く、天気は短い周期で変化した。 気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は7.7～10.3℃(平年差 2.9～3.7℃)となった。 降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は9.0～49.0mm(平年比 44～163%)となった。 日照時間は平年より多く、旬間日照時間は平年比 119～145%となった。</p>			<p>期間の中頃は高気圧に覆われて晴れた日もあったが、気圧の谷や寒気の影響で雨や雪の降った日が多かった。特に23日から24日にかけて強い冬型の気圧配置となり各地で雪が降った。 気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は3.4～6.1℃(平年差 -0.8～-0.3℃)となった。 降水量は平年並か平年より少なく、旬降水量は7.5～38.5mm(平年比 42～120%)となった。 日照時間は平年並で、旬間日照時間は平年比 87～103%となった。</p>		
	高い	並	並	かなり高い	多い	多い	並	並	並
2月	<p>低気圧や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、期間の終わりは高気圧に覆われて晴れた。5日は低気圧が九州を通過した影響で大雨となった。 気温は平年より高く、旬平均気温は5.9～8.4℃(平年差 1.0～2.7℃)となった。 降水量は平年より多いかかなり多く、旬降水量は24.0～61.5mm(平年比 134～338%)となった。 日照時間は平年より少なく、旬間日照時間は平年比 52～76%となった。</p>			<p>天気は数日の周期で変化し、高気圧に覆われて晴れた日もあったが、14日から15日、19日から20日は前線や湿った空気の影響で雨が降り、19日は大雨となった所があった。19日は南よりの風が強まり「春一番」が吹いた。 気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は9.2～12.2℃(平年差 2.9～4.7℃)となった。 降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は30.5～74.0mm(平年比 97～203%)となった。 日照時間は平年並か平年より多く、旬間日照時間は平年比 102～129%となった。</p>			<p>前線や低気圧、寒気の影響で、曇りや雨の日が多く、21日は前線が九州付近に停滞し大雨となった。 気温は概ね平年並で、旬平均気温は7.2～9.2℃(平年差 -0.4～1.5℃)となった。 降水量は平年より多いかかなり多く、旬降水量は46.5～89.5mm(平年比 183～307%)となった。 日照時間は平年より少ないかかなり少なく、旬間日照時間は平年比 41～70%となった。</p>		
	高い	かなり多い	並	かなり高	多い	かなり多い	並	かなり多い	かなり少ない
3月	<p>天気は数日の周期で変化し、期間の初めと終わりは高気圧に覆われて晴れたが、期間の中頃は気圧の谷や湿った空気の影響で曇りや雨となった。3日は冬型の気圧配置が強まり雪が降った所もあった。 気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は6.4～8.6℃(平年差 -1.0～-0.4℃)となった。 降水量は概ね平年並か平年より少なく、旬降水量は18.0～58.5mm(平年比 49～156%)となった。 日照時間は平年並か平年より多く、旬間日照時間は平年比 97～126%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かった。12日は気圧の谷や寒気の影響で大雨となった所があった。20日は低気圧が発達しながら日本海を進んだ影響で気圧の傾きが大きくなり強風となった。 気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は9.1～11.5℃(平年差 0.1～1.1℃)となった。 降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は22.0～49.0mm(平年比 68～132%)となった。 日照時間は平年よりかなり多く、旬間日照時間は平年比 132～143%となった。</p>			<p>期間のはじめと終わりに高気圧に覆われて晴れた日があったが、気圧の谷や前線、湿った空気の影響で雨の降った日が多く、大雨となった所があった。 気温は概ね平年よりかなり高く、旬平均気温は12.7～14.3℃(平年差 1.8～3.4℃)となった。 降水量は平年よりかなり多く、旬降水量は64.5～158.0mm(平年比 214～350%)となった。 日照時間は平年より少なく、旬間日照時間は平年比 65～82%となった。</p>		
	低い	並	並	並	並	かなり多い	かなり高い	かなり多い	少ない

注1) 表中の平均気温、降水量、日照時間は、福岡地点での平年値との比較を表す。

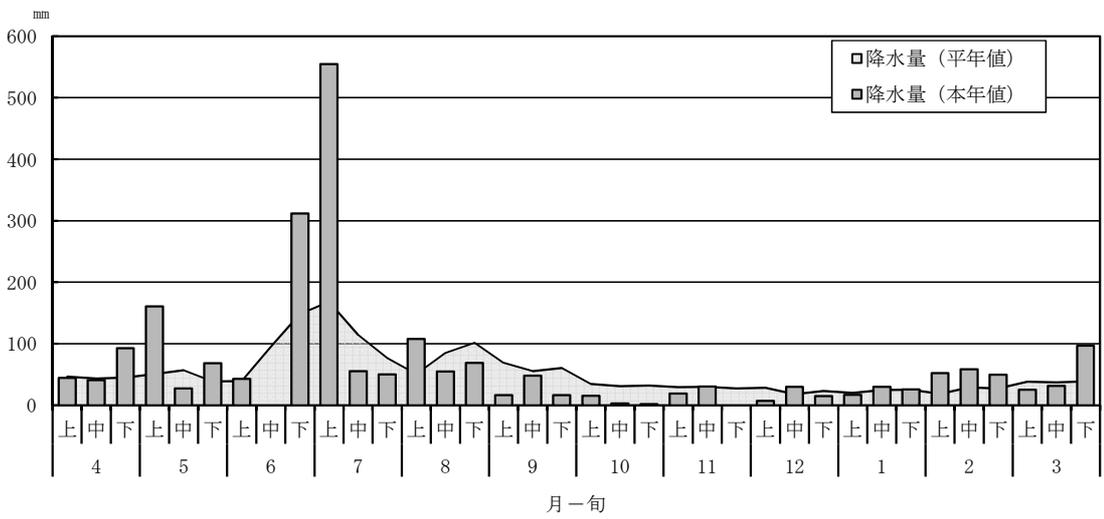
注2) 福岡県気象月報 福岡管区气象台 令和5年(2023年)4月～令和6年(2024年)3月から抜粋

(2) 気象図(太宰府アメダス、令和5年4月～令和6年3月)

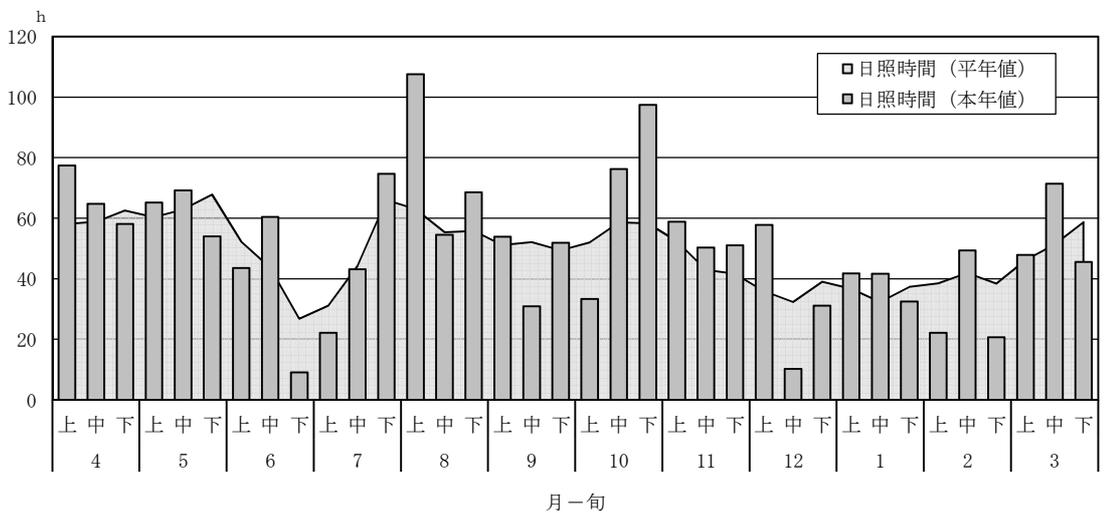
① 気温の推移



② 降水量の推移



③ 日照時間の推移



注) 平年値：1991～2020年

3 農作物の生育概況

(1) 普通作物

ア 水稻（令和5年度米・麦・大豆生産改善情報より抜粋）

分けつ期の6月下旬から7月上旬が平年に比べ日照不足で推移し、分けつが抑制され穂数が少なくなったことから、全もみ数が少なくなった。

9月以降、おおむね天候に恵まれ、登熟はやや良くなったことから、作況指数100と収量は平年並となった。

イ 麦類（令和5年度米・麦・大豆生産改善情報より抜粋）

播種期は、好天に恵まれたことから作業は順調に進み、播種最盛期は平年に比べて小麦、二条大麦で2日早くなった。

出芽は、おおむね良好であった。

1月中旬以降、曇雨天が多く鎮圧（麦踏み）や土入れ、追肥等の管理作業は遅れ気味であった。

2月以降が高温、少雨で経過したことにより、草丈は高く、茎数は平年並み～やや多く確保された。

3月上旬以降も高温で経過したことから、穂数は平年並み～やや多く確保された。出穂最盛期は平年に比べて小麦で3日、二条大麦で5日早くなった。出穂後は、高温で経過し日照時間も十分に確保され、子実の充実も良好であった。

収穫作業は、順調に終了し、刈取最盛期は平年に比べて小麦、二条大麦で4日早くなった。

10a 当たり収量は、穂数が確保され、登熟が良好となり、平年より小麦、二条大麦ともに豊作であった前年よりやや少なく、平年よりやや多くなった。

ウ 大豆（令和5年度米・麦・大豆生産改善情報より抜粋）

播種は、県北地域で6月下旬から、県南地域で7月上旬から開始されたが、降雨の影響により進まず7月20日頃が最盛期となった。出芽・苗立ちは、概ね順調であったが、7月中旬播きについては、梅雨末期の大雨により一部のほ場で出芽不良が発生した。

初期生育は、台風第6号（8月9～10日）による影響はほぼ無く、7月下旬から8月下旬が高温で適度に降雨があったため順調に生育した。中耕・培土作業は、8月中下旬の天候が比較的安定していたため、播種が遅れたほ場を除き概ね実施され、生育は良好であった。開花期は平年並みであった。

8月中旬以降は、高温、多照、少雨となったが、定期的に降雨があり莢数は十分確保された。

9月下旬以降は、気温は平年並みであったが多照、少雨が続く乾燥気味の生育となり、子実肥大に影響した。

病害虫は、ハスモンヨトウが県南地域を中心に多発し、葉の食害が目立った。白絹病、黒根腐病が一部地域の大豆の連作ほ場で発生した。

葉の黄化は10月20日頃から始まり、落葉期は10月30日頃で、青立ち株は一部地域を除いて少なかった。

播種後から莢伸長期の生育は順調で、試験場の作況試験では主茎長は平年並み、 m^2 当たり莢数は多かったが、雨の少ない地域では主茎長が短かった。

収穫は11月上旬から始まり、最盛期は11月中旬であった。収穫期は雨が少なかったことから、収穫は概ね12月上旬に終了した。

10a 当たり収量は、百粒重は平年に比べやや軽いものの、莢数が確保されたことで、平年に比べ多くなった。莢数は、出芽から着莢期までの適度の降雨により多くなり、大粒比率の低下は、子実肥大後期の乾燥による充実不足と推察される。なお、紫斑病粒の発生は少なかったが、カメムシによる虫害粒の発生が目立った。

(2) 果樹

ア かき（令和5年度かき専門委員会資料より抜粋）

気温の影響で、展葉期は平年より11～13日程度早く、開花期は平年より8～10日早かった。「富有」については、雄花・雌花の着生は平年より多かった。

生理落果率は「太秋」を除き、平年並～少なかった。

果実肥大には「西村早生」は平年より大きく、「松本早生富有」「富有」は平年より小さかった。収穫期は「太秋」が平年比早く、「早秋」が早く、他は概ね平年並であった。

イ かんきつ（温州みかん）（令和5年度福岡かんきつ生産販売振興対策会議資料より抜粋）

発芽期は平年より5～8日程度早く、開花は平年より4～5日早かった。一次落果は並で、二次落果はやや少～並であり、着果量は極早生が並、早生がやや多、普通が多かった。

果実肥大は着果が多い園を中心に並～小玉傾向で推移した。糖度は、少雨・乾燥の影響で、全般に高かった。

ウ なし（令和5年度福岡なし生産販売振興対策会議資料より抜粋）

露地作型において、満開日は「幸水」では3月31日、「豊水」では3月28日で、前年より早く平年並であった。結実、新梢伸長は平年並であった。収穫期の果実肥大はやや小玉傾向で、糖度について「幸水」では並～良好、「豊水」では平年並であった。

出荷開始は、「露地幸水」は7月下旬から、「露地豊水」は8月中旬からで、平年並であった。

（3）野菜

ア イチゴ（令和4年6月～令和5年4月）（令和4年度イチゴ生産販売振興対策会議資料より抜粋）

苗の切り離し後、降雨が比較的少なく日照時間が長かったため、生育は概ね順調であったが、切り離しが遅れたほ場では、6月下旬～7月上旬の極端な高温の影響で一部萎れが生じた。その後は高温傾向であったため、生育は比較的順調であった。しかし、局地的な大雨や一時的な浸水被害が生じた地域では、8月以降に炭疽病が発生し、枯死株も多く見られた。

早期作型の花芽分化は、入庫前に高温で推移したため、株冷4型で一部分化にバラつきが見られたが、株冷5型は順調に分化が進んだ。普通作型については、9月上旬の低温に一部の苗が感応し分化が進んだが、9月中旬以降は高温傾向であったため、全体として花芽分化は例年より遅く、9月25日以降の分化となった。

定植後は定期的な降雨があったことから活着は比較的良好であった。その後も定期的な降雨があったが、早期作型を中心に寒冷紗被覆による2番果房対策が実施されたことから、生育旺盛な株は昨年より少ない傾向となった。また、マルチ・ビニル被覆については、降雨の影響で遅れたほ場が見られたが、10月末までにはほぼ終了した。

早期作型の1番果房の出荷は、早いほ場で11月2日から開始されたが、全体としては昨年より数日遅い出荷開始となった。11月以降は朝晩の冷え込みが一時的に強まったが、日中は好天が続いたことで、出荷が前進化し、12月中旬には終盤を迎えた。普通作型では、12月上旬から出荷が始まったが、その後の寒波の影響でガラガラとした出荷が続いた。

早期作型の2番果房の出荷は、1月中旬から開始されたが、その後の強い寒波の影響等により、果実の着色や肥大が進まずガラガラとした出荷となった。また、2月上旬から出荷開始となった普通作型においても、果房の連続傾向による着果負担や低温による草勢低下により、出荷量が増加することなく、2月中旬にかけて緩やかな出荷のピークとなった。

3番果房の出荷は3月上旬から開始された。1月の寒波の影響で生育が停滞したため、出荷量は例年を下回り、2月下旬から3月上旬にかけて出荷の谷となった。しかし、その後は平年よりも気温が高い傾向にあったため、3月中旬から出荷量が増加し、3月下旬に出荷のピークが見られた。

4番果房は4月以降から収穫が開始されたが、生育ステージのバラつきが大きく、ガラガラとした出荷となった。

イ 冬春トマト（令和4年10月～令和5年4月）（令和4年度トマト生産対策会議資料より抜粋）

生育初期については早い作型では夏季の高温により、1～4段で着果不良がみられたが、気温の低下とともに安定してきた。病害虫では高温の影響もありコナジラミの発生が例年より多かった。

収穫期になると3～4段までの着果不良や、高温などによる裂果が多発したことから、11月下旬までの収量は前年より低かった。11月以降、温暖な天候により順調な生育となり、2月までの出荷数量累計は前年比で微増となった。ただし、12月下旬、1月下旬の寒波で収量は減少した。3月は着果不良段の収穫であり、収量は伸びず、軟化玉、空洞果が発生した。4月に大玉傾向となり5月下旬に出荷ピークを迎えた。

重油価格上昇による加温設定温度の低下、年末、1月下旬の低温により生育進度は例年より遅く、期間を通じた出荷量は前年を下回った。

ウ 冬春ナス（令和4年9月～令和5年4月）（令和4年度ナス生産対策会議資料より抜粋）

定植期の大雨や台風の影響から定植遅れが発生し、初期生育の遅れとなった。11月好天が続いたことから出荷数量が急増したが、乾燥によりうどんこ病、ダニ類、チョウ目が多発した。12月に冷え込みにより生育は鈍化。数量減少とともに、赤果、細果等品質低下が増えた。曇天が続いて樹勢は低下し、芽流れも散見された。年末年始は一転して好天が続いたことで1月に数量は急増した。しかし中旬からは低温曇天により、樹勢低下から細果、曲がり果などの品質低下が目立った。2月に入り、気温は低かったが高日照に恵まれ、着果数も徐々に増加、出荷は安定した。なお、燃油高騰の影響から厳寒期は暖房の稼働時間短く、収量減少、品質低下が問題となった。3月に入り気温が上昇に伴い、増量となった一方で、着果負担から樹勢低下し、下級品の発生が目立った。中旬からは好天が続く、徐々に樹勢は回復、花芽も増えていった。

4月からは気温も上がり、生育は順調で中旬から出荷ピークとなった。以降、不安定な天候や夜温の寒暖差が大きかったことから、不安定な出荷となり、樹勢が低下した。5月に入っても寒暖差が大きく、出荷量の増減が激しかった。日射が強くなり、日焼け果の発生が目立った。中旬からは出荷量は安定し、月末に出荷ピークを迎えた。5月29日に梅雨入りしたことから、出荷量は落ち着き、終盤は害虫の多発や、日焼け果などの下級品増加により6月いっぱい栽培終了するところが多かった。

エ 冬レタス（各普及指導センターからの情報）

9～10月は、高温乾燥傾向により初期生育が遅れ、チョウ目害虫が多発した。11月に入り気温の低下に伴い生育は回復したが、12月中旬以降、急激な気温の低下と上昇が繰り返されたため、収量の変動が大きかった。1月以降は平年よりも高温傾向であったため、生育良好であり、収量は安定した。

オ 冬キャベツ（各普及指導センターからの情報）

9～10月は、高温乾燥傾向により定植作業は順調に進んだが、チョウ目害虫が多発し、一部地域では初期生育が遅れ、小玉傾向となった。また、11～1月にかけては、一部地域で降雹により葉に穴が開く等の被害が見られた。1月以降は平年よりも高温傾向であったため、生育は回復し前進化した。一方、降雨の影響により、一部地域で菌核病の発生が見られた。

（4）特用作物

ア 茶（農総試八女分場萌芽・実収報告より抜粋）

2月上旬から3月上旬にかけて平年より高く推移し、農総試八女分場の「やぶきた」作況園における萌芽期は平年に比べて4日早い4月1日であった。

八女分場作況園における一番茶摘採日は、過去5カ年平均より1日早い5月3日で、二番茶摘採日は4日早い6月15日であった。一番茶摘採から二番茶摘採までの期間は43日間で、過去5カ年平均より2日短かった。

一番茶は、産地全体での収量は平年に比べ多く、平均単価は平年並であった。二番茶は、収量、販売単価ともに平年並であった。

4 主要病害虫の発生及び防除状況

(1) 主要病害虫の発生状況、原因解析及び防除対策

ア 普通作物

(ア) 普通期水稻（令和5(2023)年6～9月）

a いもち病（葉いもち：並、穂いもち：並）

(a) 発生経過

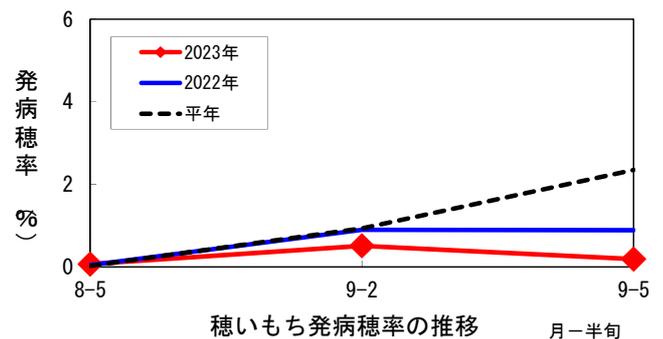
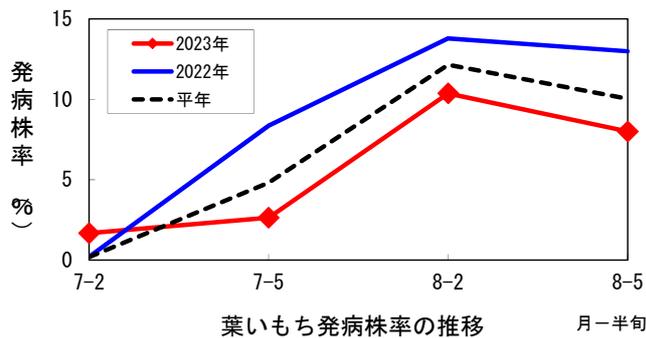
- ・葉いもち：7月2半旬の発生量は平年より多かったが、その後平年並で推移した。
- ・穂いもち：8月5半旬～9月5半旬の発生量は平年並で推移した。

(b) 原因解析

- ・葉いもち：6月下～7月上旬の寡照傾向が感染に好適な条件であったが、7月中旬～8月までは、気温は平年より高く、降水量は平年並、日照時間は平年より多く推移し、発生量は平年並になったと考えられる。
- ・穂いもち：葉いもちが多発したほ場で穂いもちが発生したが、主な感染時期である8月中下旬の降水量は平年より少なく、発生量は平年並になったと考えられる。

(c) 防除指導

- ・適切な種子消毒や育苗期の防除を徹底し、本田への持ち込みをできる限り抑える。
- ・長期残効型の箱施薬剤を使用し、発生を確認したら直ちに防除を行う。
- ・曇雨天が多く、葉の湿潤状態が継続する場合は防除回数を増加する。降雨が続き、地上散布が困難な場合は早めに粒剤の施用を行う。
- ・葉いもちの発生が多い場合は、出穂期直前と穂揃期の2回防除で穂いもちの発生を抑制する。



b 紋枯病

(a) 発生経過（発生量：やや多）

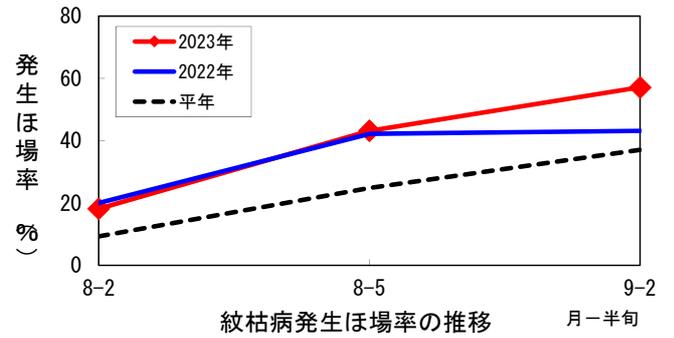
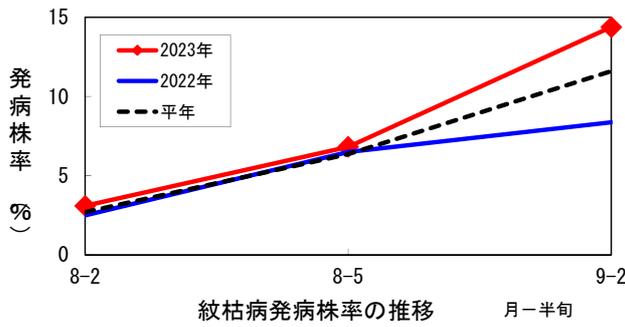
- ・8月2半旬から5半旬の発生量は平年並であったが、9月2半旬は平年より多かった。

(b) 原因解析

- ・8月の降水量は、平年並であったが、近年発生が増加傾向であり、前年に形成され土壤中で越冬した菌核が翌年の感染源となり蓄積した可能性がある。

(c) 防除指導

- ・箱施薬剤による防除及び出穂2週間～10日前の本田薬剤防除。
- ・出穂期以降高温多雨で経過し、病斑の上位進展が認められる場合は、補正防除を行う。



c 縞葉枯病

(a) 発生経過 (発生量：並)

- ・発生は認められなかった。

(b) 原因解析

- ・ヒメトビウンカ第1世代幼虫の縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、平成24年(2014年)以降低下している。
- ・ヒメトビウンカに効果が高い箱施薬剤の使用。
- ・収穫後ひこばえ発生前のは場耕起及び畦畔雑草管理等の徹底。

(c) 防除指導

- ・冬期のは場耕起と畦畔雑草防除によるヒメトビウンカの生息密度低減。
- ・箱施薬剤によるヒメトビウンカの防除。

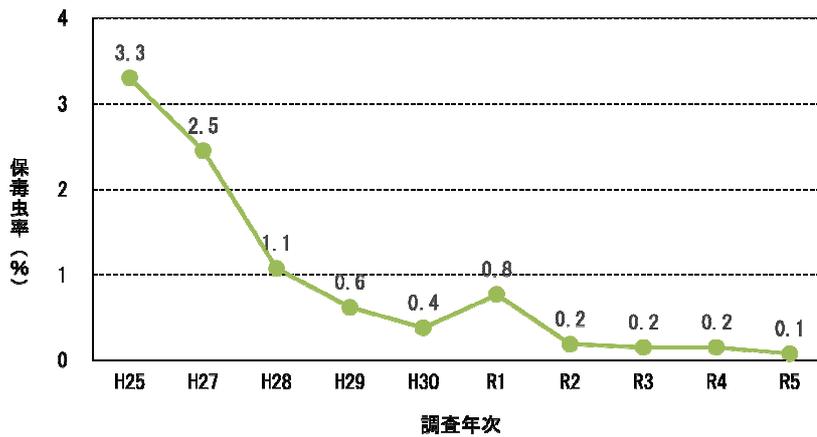


図 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移
(検定対象：県内14地点の小麦ほ場で採集した第一世代幼虫)
注)H26年は欠測のためデータなし

d ヒメトビウンカ

(a) 発生経過 (発生量：少)

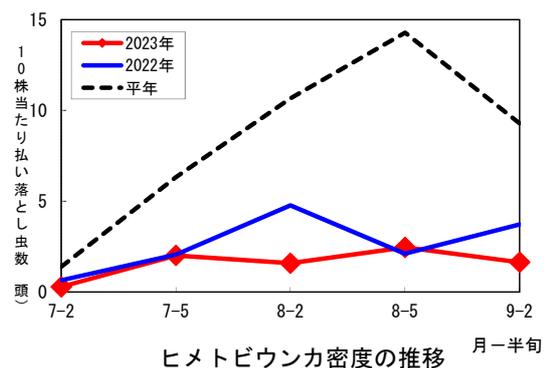
- ・予察灯(県内5地点合計)での誘殺数は、73頭(平年45頭)で、平年より多かった。
- ・普通期移植では7月2半旬から発生が認められ、平年より少なく、前年並で推移した。

(b) 原因解析

- ・本種に効果の高い箱施薬剤の施用や本田防除の実施により発生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・冬期のは場耕起と畦畔雑草防除。
- ・箱施薬剤による防除。



e セジロウンカ

(a) 発生経過（発生量：少）

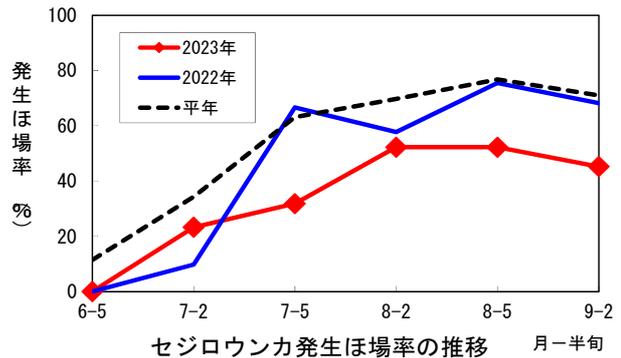
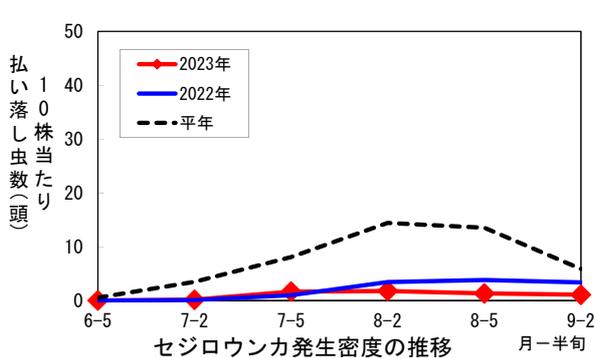
- ・予察灯（県内5地点合計）での誘殺数は、298頭（平年448頭）で平年より少なかった。
- ・ほ場での発生は平年より少なく、前年並で推移した。

(b) 原因解析

- ・飛来量が少なかった。
- ・本種に効果の高い箱施薬剤の施用や本田防除の実施により発生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・幼穂形成期～穂揃期に吸汁加害を受けると、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、もみ数の減少が生じるので、7月5半旬～8月2半旬に幼虫の発生が多い場合は薬剤防除を実施する。



f トビイロウンカ

(a) 発生経過（発生量：少）

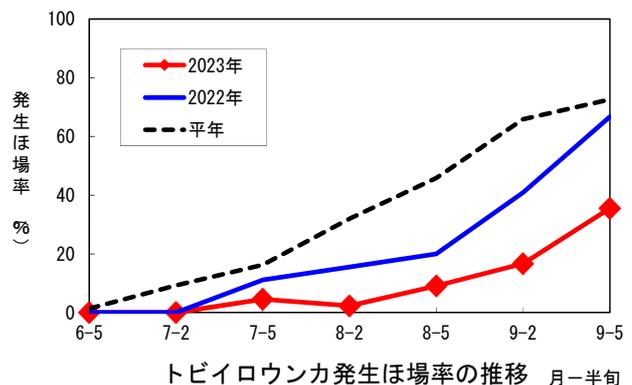
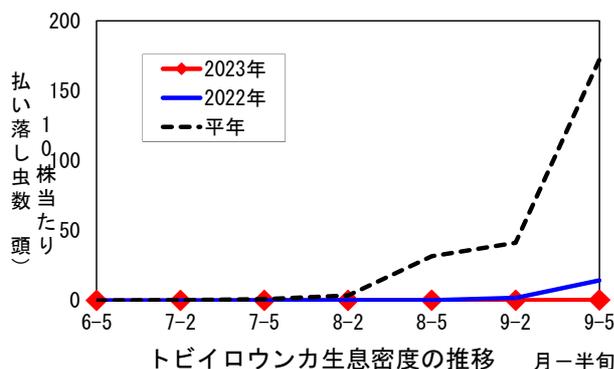
- ・予察灯（県内5地点合計）での誘殺数は、7頭（平年40頭）で平年より少なかった。7月3日以降に予察灯で散発的に飛来が確認された。
- ・巡回調査では、7月5半旬から発生が確認されたが、発生密度及び発生ほ場率は9月5半旬まで平年より少なく推移した。

(b) 原因解析

- ・飛来量が少なく、本種に効果の高い箱施薬剤の普及や本田防除の実施により発生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・飛来に基づく発生予想パターン図を参考に、適期防除を行う。
- ・ほ場での発生状況を確認し、要防除水準を超えた場合は早急に防除を行う。
- ・薬剤が株元まで届くよう散布し、散布後に防除効果を必ず確認する。効果が認められない場合は追加防除を行う。



g 斑点米カメムシ類（イネカメムシ）

(a) 発生経過（発生量：多）

- ・県下5か所の予察灯における5月1半旬～9月4半旬の誘殺虫数は、前年より多かった。
- ・出穂期のほ場でのすくい取り虫数は、前年より多かった。

(b) 原因解析

- ・8月以降は高温傾向、9月は高温少雨で推移し、増殖に有利な条件であった。
- ・熟期が異なる品種が作付けされている地域では、カメムシ類の増殖に有利な状況であったと考えられる。

(c) 防除指導

- ・出穂期前後の本田防除及び追加防除。

h 斑点米カメムシ類（その他カメムシ）

(a) 発生経過（発生量：並）

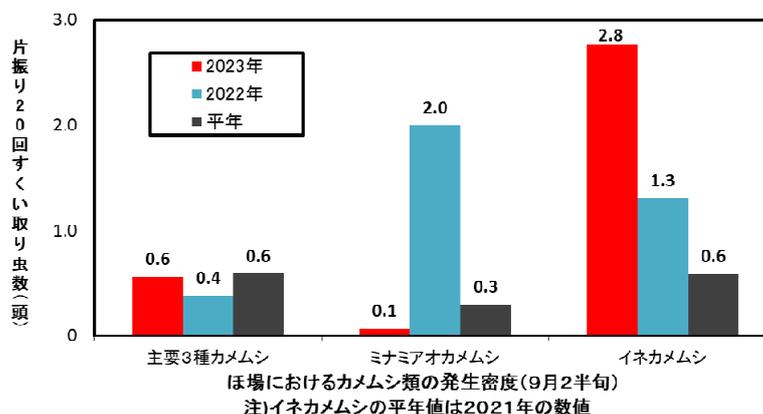
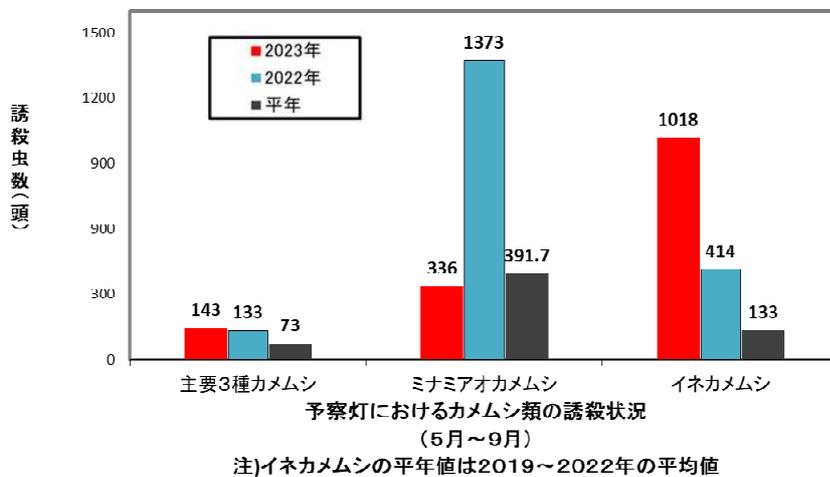
- ・県下5か所の予察灯における5月1半旬～9月4半旬の誘殺虫数は、主要3種カメムシ（クモヘリ、ホソハリ、シラホシ）は平年より多く、ミナミアオカメムシは平年よりやや少なかった。
- ・出穂期のほ場でのすくい取り虫数は、主要3種カメムシ・ミナミアオカメムシは平年並、前年並であった。

(b) 原因解析

- ・8月以降は高温傾向、9月は高温少雨で推移し、増殖に有利な条件であったが、本田防除により、発生が抑えられた。

(c) 防除指導

- ・穂揃い7～10日後の本田防除。
- ・令和5年7月14日に技術情報第1号を発出し、防除の徹底を呼びかけた。



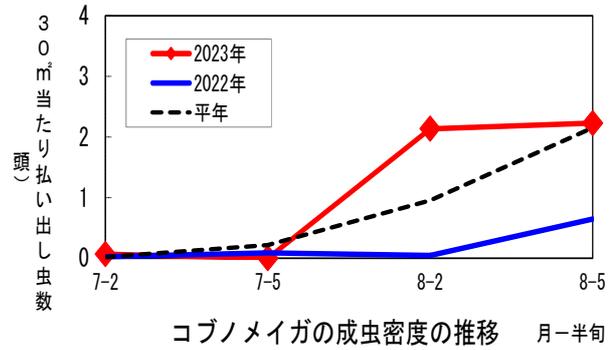
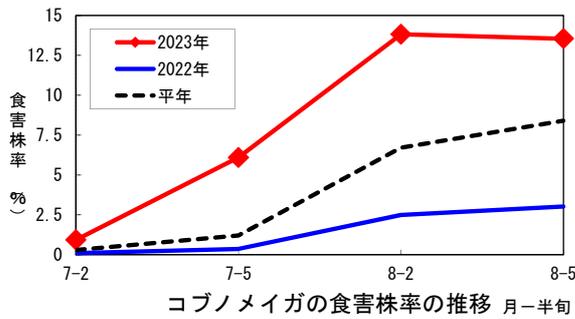
i コブノメイガ

(a) 発生経過（発生量：多）

- ・予察灯（県内5地点）では、飛来成虫は捕獲・誘殺されなかった。
- ・7月2半旬で山間部・沿岸部を中心に発生が多く7月5半旬では平坦部でも発生がほ場調査で確認され、発生密度及び発生ほ場率は8月5半旬まで平年より多い傾向で推移した。

(b) 原因解析

- ・7月中旬以降、気温は高く、降水量は平年並又は低く推移した。増殖に有利な条件が続いたことで発生が拡大した。



(c) 防除指導

- ・箱施薬剤による防除。
- ・本田期の基幹防除。

j その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・発生は認められなかった。	・台風等による冠水がなかった。 ・ほ場基盤整備が進み、中間宿主となる雑草の生息地が減少した。
稲こうじ病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・9月2半旬より発生が認められ、発生量は平年並で推移した。	・8月の高温傾向。 ・8月上中の降水量はやや多かった。
心枯線虫病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・発生は認められ、発生量は平年並であった。	・温湯や MEP による種子消毒の徹底。
縞葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・発生は認められなかった。	・保毒虫率の低下。 ・畦畔雑草管理等、耕種防除の徹底。
もみ枯細菌病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・9月2半旬に発生が認められ、発生量は平年並であった。	・8月の降水量は平年並。
ばか苗病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・発生は認められ、発生量は平年並であった。	・温湯・イブコソール・銅等による種子消毒の徹底。
ツマグロヨコバイ	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	・6月5半旬より発生が認められ、平年よりやや少なくなりました。	・箱施薬によるウンカ類との同時防除。
イネクロカメムシ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・8月2半旬に発生が認められたが発生はほとんどなかった。	・本田での補正防除。

イネミズゾウムシ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・発生は認められなかった。	・箱施薬剤等による防除。
ニカメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・発生は認められなかった。	・箱施薬剤等による防除。
フタオビコヤガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・発生は認められなかった。	・箱施薬剤等による防除。
スクミリンゴガイ	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	・発生は認められたものの、多くのほ場で食害はほとんど認められなかった。	・浅水管理。 ・薬剤による補正防除。

(イ) 大麦 (令和5年(2023)年1～5月)

a オオムギ網斑病

(a) 発生経過 (発生量：やや多)

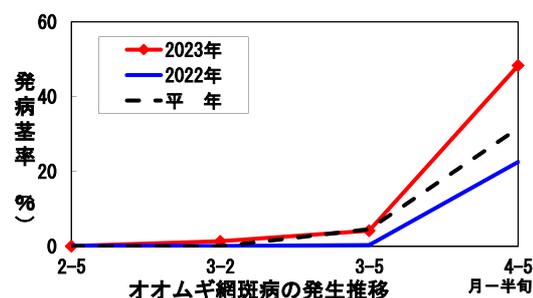
- ・2月5半旬調査で発生が確認され、4月5半旬の発生量は平年より多かった。

(b) 原因解析

- ・1月の降水量が平年より多く、1月から4月の気温が平年より高かった。
- ・3月中旬～4月の気温が平年より高く、4月の降水量も多い傾向だったため、4月以降の発生が拡大したと考えられる。

(c) 防除指導

- ・トリフルミゾール等の種子消毒による防除。
- ・茎立期に発生を確認し、感染が広がっている場合は、出穂15日前～出穂期までにプロピコナゾール等で補正防除を行う。
- ・被害残さはすき込む。



b その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
赤かび病	平年：やや早 前年：－	平年：並 前年：多	・4月5半旬に発生が一部地域で確認され、発生量は平年並で推移した。	・主要感染期間である4月の降水量が平年より多かったため、発生がみられたが、薬剤防除により、発生を抑えられた。
うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・耐病性品種が普及。 ・赤かび病対象薬剤による同時防除。
黒穂病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。
さび病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・前年までのさび病類の発生が非常に少なかったために、発生源が少なかった。
縮萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・耐病性品種が普及したことにより、発生が抑制された。
オオムギ斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。

(ウ) 小麦（令和5年(2023)年1～5月）

a 赤かび病

(a) 発生経過（発生量：並）

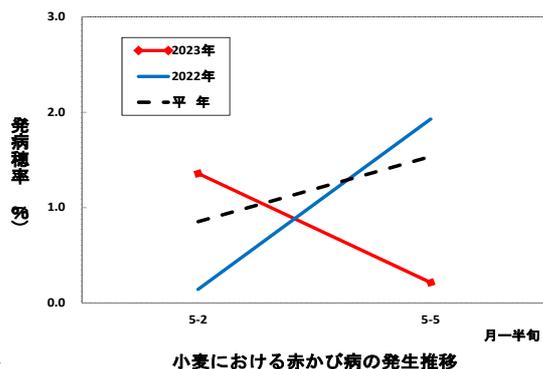
- ・5月2半旬では平年よりやや多く、5月5半旬は平年より少なく推移した。

(b) 原因解析

- ・主要感染期間である4月の降水量が平年より多かったため、発生がみられたが、薬剤防除により、発生を抑えられた。

(c) 防除指導

- ・開花期(出穂後7～10日)に重点をおいて実施する。
- ・降雨が続き、多発が予想される場合には、第一回目散布の7～10日後に補正防除を行う。
- ・令和5年3月24日に技術情報第15号を発出し、適期防除を呼びかけた。



小麦における赤かび病の発生推移

b コムギ黄斑病

(a) 発生経過（発生量：多）

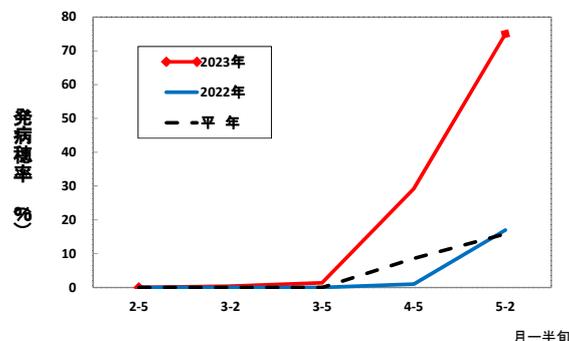
- ・2月5半旬調査で発生が確認され、発生量は3月まで平年並で推移したものの、4月5半旬以降平年より多く推移した。

(b) 原因解析

- ・1月の降水量が平年より多く、前年より早く発生した。
- ・3月中旬～4月の気温が平年より高く、降水量も多い傾向だったため、その後の発生が拡大した。

(c) 防除指導

- ・水田との輪作による発病の抑制。
- ・茎立期に発生を確認し、感染が広がっている場合は、出穂期までにプロピコナゾール等で補正防除を行う。
- ・伝染源である被害残渣をほ場外に持ち出し、処分する。



コムギ黄斑病の発生推移

c その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・赤かび病対象薬剤による同時防除。
黒穂病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。
さび病類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：多	・5月2半旬に発生が一部地域で確認され、発生量は平年並で推移した。	・3月中旬～4月の気温が平年より高く、麦の伸長が早くなったため、一部地域で発生した。
縮萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・耐病性品種が普及したことにより、発生が抑制された。
シロトビムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・2月5半旬調査で発生が確認され、発生量は平年並であった。	・播種の遅かった一部のほ場で出芽が遅れたために被害が発生した。

(エ) 大豆 (令和 5 年 (2023) 年 7 ~ 10 月)

a ハスモンヨトウ

(a) 発生経過 (発生量: 多)

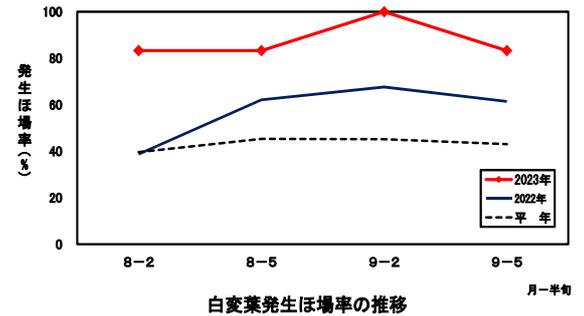
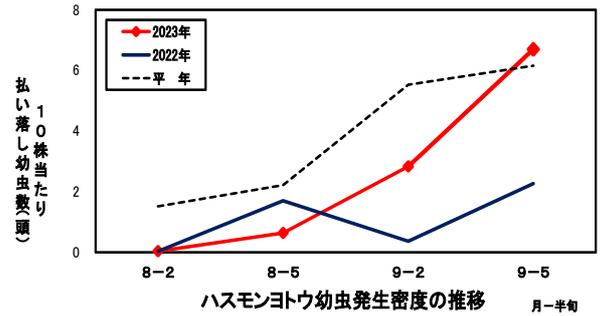
- ・ 5 ~ 10 月のフェロモントラップ (県内 3 か所) 誘殺数は平年並であった。9 月に誘殺数のピークがあった。
- ・ 8 月 2 半旬以降、白変葉の発生は平年より多く推移し、9 月 2 半旬以降、幼虫の発生量は平年より多く推移した。

(b) 原因解析

- ・ 8 月は高温傾向、9 月以降は高温少雨傾向で推移した。
- ・ 増殖に好適な条件であったため、基幹防除を実施されたものの発生が拡大したと考えられる。
- ・ 一部薬剤の感受性の低下が一因と考えられる。

(c) 防除指導

- ・ 白変葉は見つけ次第除去する。
- ・ 若齢幼虫期防除の実施。
- ・ フェロモントラップを活用した防除適期の把握。
- ・ 同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布の徹底。
- ・ 令和 5 年 9 月 13 日に技術情報第 3 号、同年 9 月 29 日に技術情報第 4 号を発出し補正防除等呼びかけた。



b 吸実性カメムシ類

(a) 発生経過 (発生量: やや多)

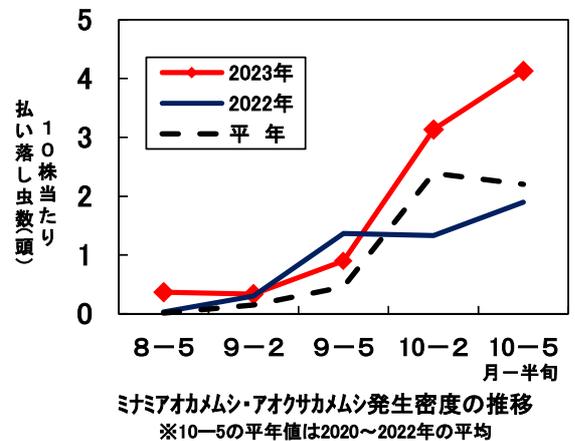
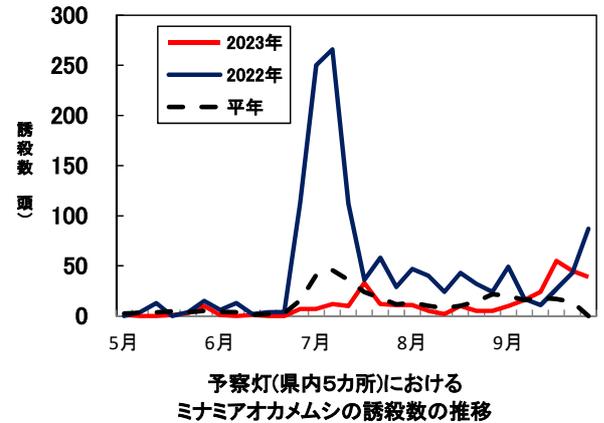
- ・ ミナミアオカメムシの予察灯 (県内 5 か所) 誘殺数は、平年並であったものの、9 月 3 半旬以降に増加傾向で推移した。
- ・ ミナミアオカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ等のは場での発生量は平年並であったものの、10 月 2 半旬以降、ミナミアオカメムシ及びアオクサカメムシは増加傾向で推移した。

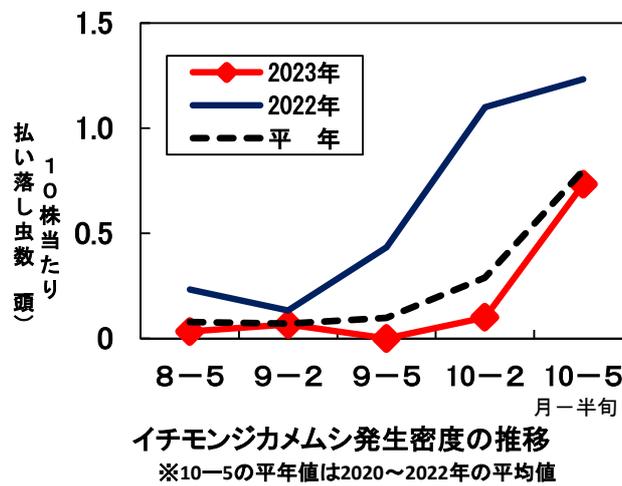
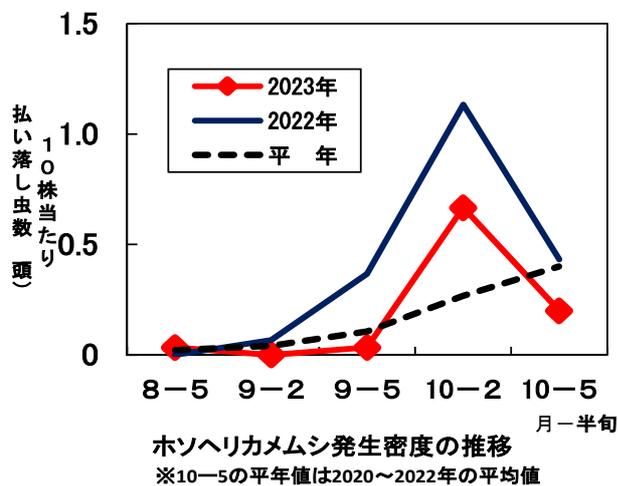
(b) 原因解析

- ・ 8 月は高温傾向、9 月以降は高温少雨傾向で推移した。
- ・ 増殖に好適な条件であったため、1 回の防除では発生が抑えられなかった。

(c) 防除指導

- ・ 開花期後 30 日前後に 1 回目の防除を行う。
- ・ 多発生の場合は、その後 7 ~ 10 日後に 2 回目の防除を行う。





c その他の病害虫

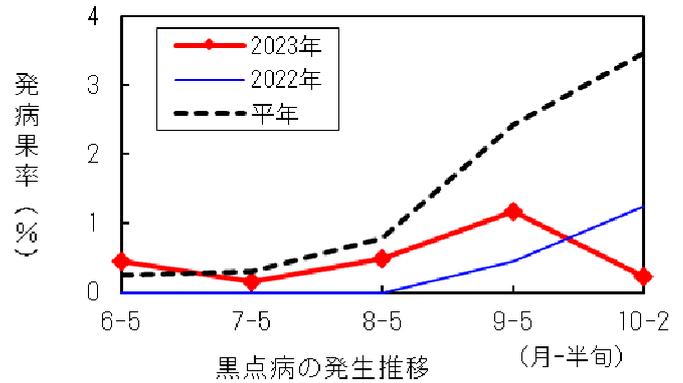
病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
葉焼病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	・ 9月2半旬に発生が認められ、期間を通じて発生量は平年並であった。	・ 8月の降水量は平年並であった。8月中旬以降に大雨や台風の発生などがなかったため、発生が遅く感染が拡大しなかった。
べと病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	・ 8月5半旬に発生が認められ、9月2半旬の発生量は平年並であったが、9月5半旬には平年より多くなった。	・ 8月の降水量は平年並であった。生育量が旺盛となり、通風が悪く発病しやすい環境となったため感染が拡大した。
さび病	平年：並 前年：早	平年：少 前年：並	・ 9月2半旬に一部地域で発生が認められ、発生量は平年より少なかった。	・ 8月中旬以降に大雨や台風の発生などがなかったため、感染が拡大しなかった。
フタスジヒメハムシ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・ 8月2半旬に発生が認められ、平年並であった。	・ カメムシ類対象薬剤による同時防除。
アブラムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・ 発生は認められなかった。	・ カメムシ類対象薬剤による同時防除。

イ 果樹

(ア) かんきつ (令和5(2023)年3月~10月)

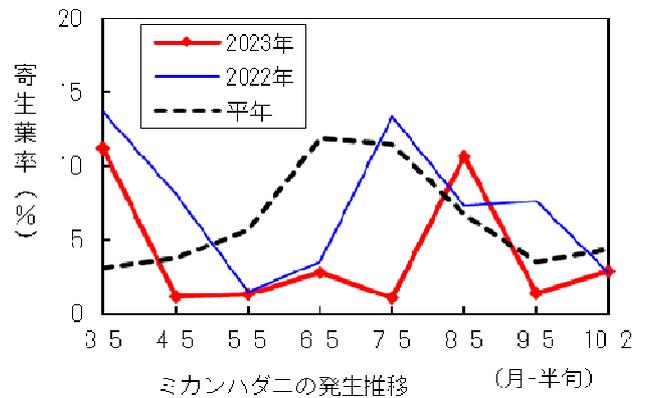
a 黒点病

- (a) 発生経過 (発生量: やや少)
 - ・ 6月~8月の発病果率は平年並で推移したが、以降はやや少ない発生となった。
- (b) 原因の解析
 - ・ 昨年度も発生量は少なく、樹体等の菌密度も低かった。
- (c) 防除指導
 - ・ 定期予報により発生状況を周知し、適期防除を指導。



b ミカンハダニ

- (a) 発生経過 (発生量: 並)
 - ・ 3月下旬の発生は多かった。達観では4月以降の被害葉は多かったものの、寄生葉率は平年並に抑えられた。
 - ・ 今年度は春先にカンザワハダニの寄生及び被害が散見された (グラフ省略)。
- (b) 原因の解析
 - ・ 暖冬のため越冬虫数が多かったと考えられる。
 - ・ 春先の発生は多かったが、防除の徹底により平年並に推移した。
- (c) 防除指導
 - ・ 定期予報により発生状況を周知し、適期防除を指導。
 - ・ 薬剤感受性低下を避けるため、マシン油の活用や薬剤のローテーション散布を指導。



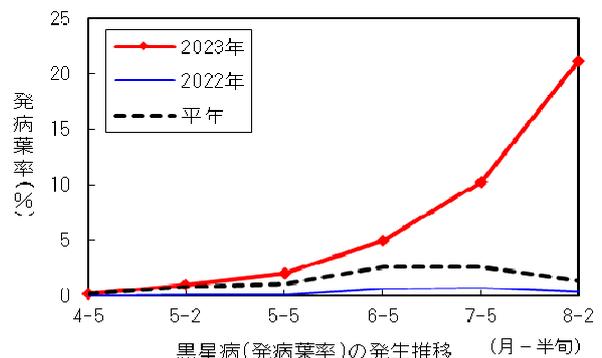
c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
そうか病	平年: 並 前年: やや早	平年: 並 前年: 並	・ 葉や果実での発生は一部ほ場で認められた。発生量は平年並であった。	・ 適期に防除が実施された。
かいよう病	平年: 並 前年: 並	平年: やや少 前年: やや少	・ 葉、果実ともに発生量は平年より少なかった。	・ 適期に防除が実施された。
アブラムシ類	平年: 並 前年: 遅	平年: やや少 前年: 並	・ 発生ほ場率・寄生葉率は少なく推移した。	・ 適期に防除が実施された。

(イ) なし (令和5(2023)年4~8月)

a 黒星病

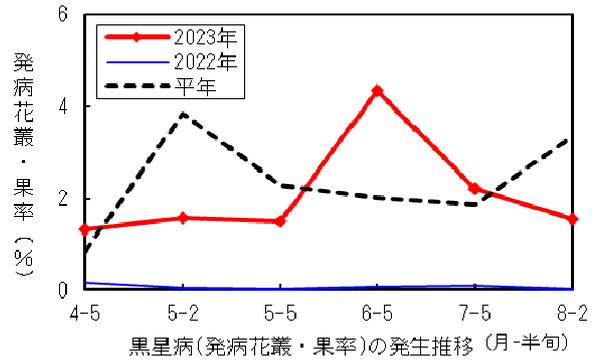
- (a) 発生経過 (発生量: 多)
 - ・ 葉での発生は、6月以降収穫終了まで平年より多かった。
 - ・ 果実での発生は4月下旬から一部ほ場で認められ、5月は平年より発生量が少な



かった。その後は平年並に推移したが局地的に多発した。

(b) 原因の解析

- ・発病果率については、本病の最も重要な感染時期である開花前（3月下旬）に降水量が多く、花叢が感染したが、5月は被害果の摘果が徹底され、発病葉率に比して低くなった。
- ・局地的に多発した要因は、適期防除ができなかったことや、DMI 剤の効果低下が考えられる。



(c) 防除指導

- ・適期防除、罹病葉や罹病果の除去、感受性低下を避けるための薬剤のローテーション散布、DMI 剤等の使用回数制限などについて、定期予報で指導。

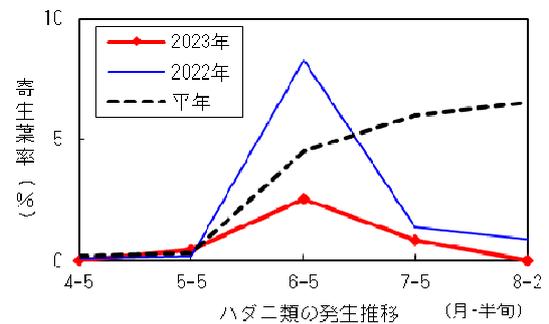
b ハダニ類

(a) 発生経過（発生量：やや少）

- ・寄生葉率は平年よりやや少なかった。

(b) 原因の解析

- ・前年の防除が徹底されたため、越冬虫数が少なかった。
- ・6～7月は多雨傾向であった。
- ・防除が徹底された。



(c) 防除指導

- ・定期予報により発生状況を周知し、適期防除を指導。
- ・薬剤感受性低下を避けるため、薬剤のローテーション散布について指導。

c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
赤星病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・小生子の飛散ピークは、4月上旬頃と考えられた。 ・発生量は平年より少で前年並であった。ほ場率は平年よりやや低く推移した。	・適期に防除が実施された。
黒斑病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・発生は軽微であった。	・県の主力品種である「幸水」、「豊水」は抵抗性であるため。
ナシヒメシンクイ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・フェロモントラップによる誘殺数は概ね平年並であった。	・一部ほ場で適期防除ができなかった。
カメムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	・予察灯捕殺数は8月以降増加したが、果実への被害は軽微であった。	・ヒノキ球果が十分な量あったため、圃場への飛来は少なかったと考えられる。
アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	・発生は平年並の4月上旬から認められたが、その量は平年よりやや少なかった。	・防除適期に他の害虫と同時に防除されたと考えられる。
モモシンクイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・フェロモントラップによる誘殺数は概ね平年並であった。	・ほ場調査は行っていない。またフェロモントラップ誘殺数は例年少ない。
ハマキムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・被害は平年同様に軽微であった。	・他の害虫と同時に防除されたと考えられる。

(ウ) かき (令和 5 (2023) 2023 年 4～10 月)

a 炭疽病

(a) 発生経過 (発生量：並)

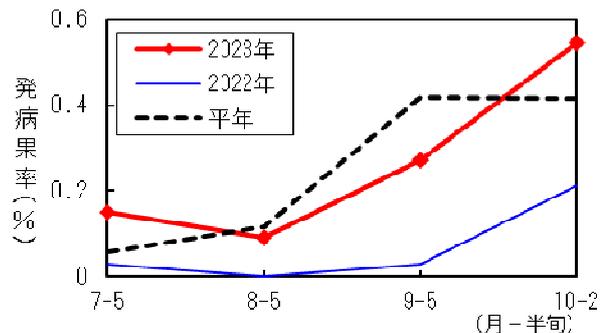
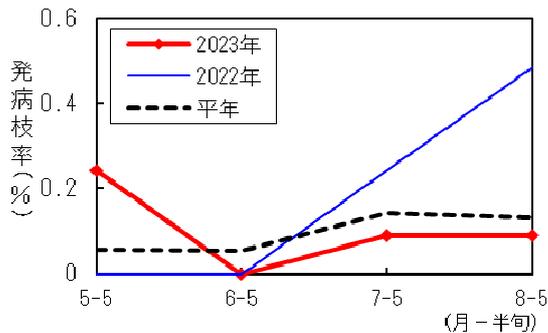
- ・発生は、枝では5月下旬、果実では7月から認められ、平年並で推移した。

(b) 原因の解析

- ・春先に雨量が多く高温であったことから炭疽病の初発が早くなり、防除により一時は抑えられたものの、その後は拡大傾向になったと考えられる。

(c) 防除指導

- ・定期予報により、罹病枝及び罹病果の除去と処分、定期防除の徹底等を指導。



新梢における炭疽病の発生推移

果実における炭疽病の発生推移

b フジコナカイガラムシ

(a) 発生経過 (発生量：やや少)

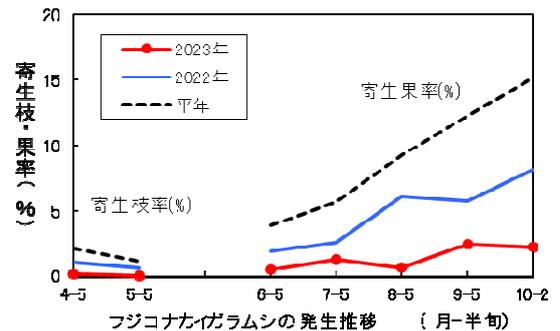
- ・発生枝率は平年並の4月から認められ、寄生枝率は4月下旬～5月下旬まで低く推移した。
- ・寄生果率は6月下旬～10月下旬まで平年より低く推移した。

(b) 原因の解析

- ・前年の寄生果率が低かったため、寄生枝率(越冬世代)は平年より低く推移した。

(c) 防除指導

- ・定期予報により、散布ムラのない丁寧な散布、天敵に配慮した薬剤の選択等を指導。
- ・特に令和5年3月31日発出の予報第1号ではトピックスに掲載し、適期防除を呼び掛けた。



フジコナカイガラムシの発生推移 (月-半旬)

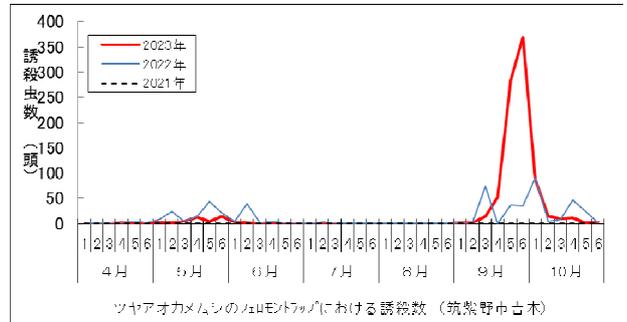
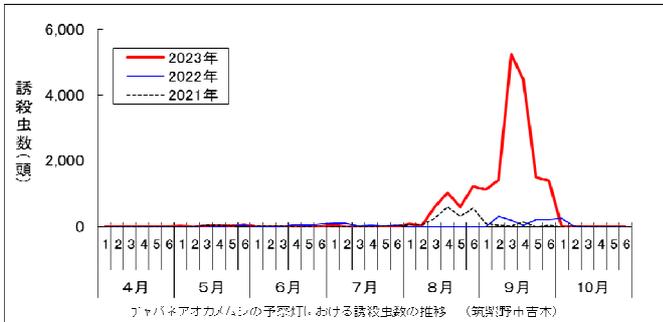
c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
カキノヘタムシガ	平年：やや遅 前年：－	平年：やや多 前年：多	・発生は7月5半旬から認められ、発生量は平年より多かった。	・夏季の高温乾燥により発生が助長されたと考えられる。
カメムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・下述の果樹カメムシ類の項を参照	・下述の果樹カメムシ類の項を参照。
ハマキムシ類	平年：並 前年：やや早	平年：やや多 前年：やや多	・フェロモントラップ誘殺は、平年並の4月上旬から認められた ・果実での被害は6月下旬から認められ、被害量は平年よりやや多く推移した。	・夏季の高温乾燥により発生が助長されたと考えられる。
アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・発生は平年同様軽微であった。	・他の害虫と同時に防除されたと考えられる。

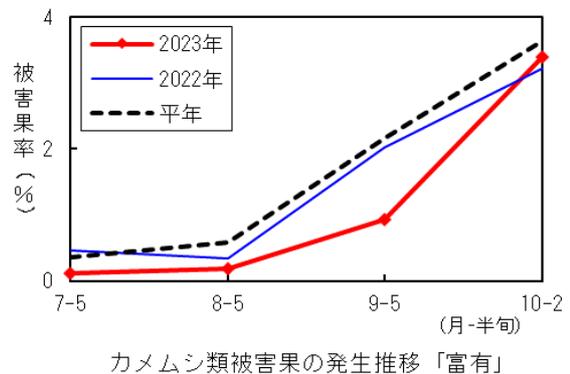
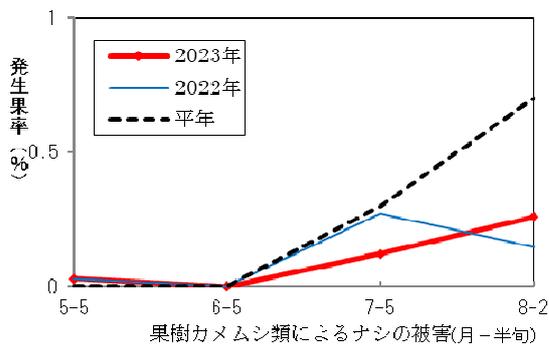
(エ) 果樹カメムシ類 (令和 5 (2023)年 4～10 月)

(a) 発生経過 (発生量: 4～7月 - 前年よりやや少 8～10月 - 前年より多)

- ・トラップ (予察灯、フェロモン) による誘殺虫数の消長は、前期(4月～8月 3 半旬)はやや少なく、後期 (8月 4 半旬～10 月) は 2014 年以降で最も多くなった。
- ・誘殺数のピークは、予察灯が 9 月中旬、フェロモントラップが 9 月末から 10 月初頭となった。



- ・予察灯や果樹園への飛来は 8 月中旬以降に増えたが、飛来数は園地間差が大きく、宅地等の光源付近にある園地で特に飛来が多い傾向であった。
- ・飛来量と加害程度は必ずしも一致しなかった。また加害は偶発的、局所的になる傾向があった。
- ・ナシの被害果率は前年並で、平年より少なかった。
- ・10 月上旬までの調査では、カキ園での被害果率は並であったが、局地的に多発が認められた。



(b) 原因の解析

- ・越冬量は前年並だったが、夏季は少雨傾向で 2 世代目が増殖しやすい条件であった。
- ・ヒノキ球果の着生量は中程度と、前年並であった。
- ・口針鞘数は調査開始から少なく、前年より低く推移した。また 10 月 2 半旬になってもヒノキからの離脱目安とされる 25 本に至らなかった。
- ・ビーティングで確認される成虫・幼虫は少ない傾向であった。これは、夏季の晴天時に球果が高温になったことにより、これを避けて成虫が他の場所に一時避難していた可能性が考えられる。
- ・近年、盛夏期には果樹カメムシ類の活動が鈍るとされる 30 度以上の気温が常態化しており、カメムシ類の生態とその予察手法に乖離が発生している恐れがあり、さらに検討が必要である。

(c) 防除指導

- ・発生予察情報を適宜発表しこれらに基づく適期防除について呼びかけるとともに、カメムシ誘殺消長の推移をホームページで随時掲載した。

越冬成虫数、ヒノキ球果着生量・口針数、ナシ及びカキ被害果の推移・ヒノキ球果上の成虫数と予察灯での成虫誘殺数の推移(全調査地点平均値)

年/項目	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2012~22 平均	
越冬成虫数(頭/m ²)	3.2	0.7	4.8	0.9	0.8	0.9	3.8	0.8	5.0	0.3	0.8	1.1	2.0	
4月~8月3半旬の 誘殺数(頭)	予察灯	4,372	392	3,493	150	252	633	1,677	152	3,531	247	624	3,037	1,411.2
	フェロモントラップ	16,926	553	18,151	238	344	506	2,633	38	5,179	19	1,181	998	4,160.7
ヒノキ球果着生量	評価値	2.2	4.1	3.5	2.8	2.8	5.0	4.4	3.6	2.0	4.5	4.4	3.7	3.6
	程度	少	中	中	やや少	やや少	やや多	中	中	少	やや多	中	中	中
ヒノキ口針数 (本/果)	7月5半旬	4.9	0.8	2.8	1.0	1.9	0.7	7.3	1.5	0.8	1.4	2.2	0.5	2.3
	8月2半旬	12.0	3.9	15.7	15.8	25.7	—	22.6	—	4.4	—	—	1.9	14.3
	8月5半旬	22.4	9.8	24.9	16.1	17.2	11.2	27.8	6.5	11.5	6.1	10.7	5.0	14.9
	9月2半旬	—	15.6	28.0	—	20.1	19.0	—	7.9	—	10.9	18.3	9.3	17.1
	9月5半旬	—	—	—	—	—	—	—	16.1	—	9.7	—	17.8	—
ナシ被害果率(%)	8月2半旬	1.3	0.3	1.1	0	0.2	0.3	0.7	0.3	2.5	0.05	0.1	0.3	0.6
富有カキ被害果率(%)	10月2半旬	1.2	8.5	9.7	1.4	1.3	4.0	2.5	0.5	3.4	1.2	3.2	3.7	3.4

(オ) キウイフルーツ (令和5(2023)年3~6月)

a キウイフルーツかいよう病

(a) 発生経過 (発生量: —)

- ・定点調査では発生は確認されなかった。

(b) 原因の解析

- ・地域・部会等で情報を共有し、予防対策や初期発生時の対応についての意識を高めている。

(c) 防除指導

- ・技術情報により、発芽前からの銅剤による予防散布、園内巡回による罹病部位の切除、健全な花粉の利用、せん定鋏等による人為的感染の防止等について指導した。
- ・新規に発生した園を特定するために、PCRによる検定を実施した。
- ・県域会議において上記の検定結果等の状況を示し、注意喚起した。

ウ 野菜

(ア) イチゴ (令和4(2022)年6月～令和5(2023)年4月)

a 灰色かび病

(a) 発生経過 (発生量: 平年並)

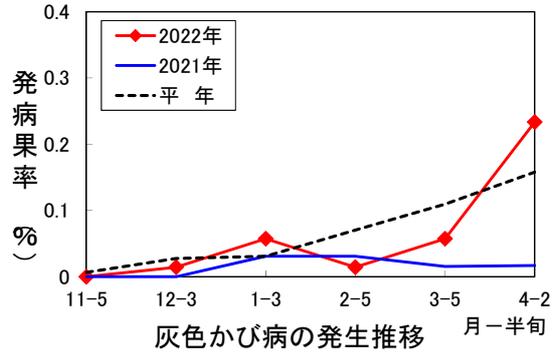
- ・発生は12月に確認された。3月まで平年並で推移したが、4月に一部ほ場で多発した。

(b) 原因解析

- ・防除の不徹底。
- ・3～4月の高温傾向。

(c) 防除指導

- ・11月以降の発生予測で、発病果の除去、換気等について指導した。



b うどんこ病

(a) 発生経過 (発生量: 育苗ほ…平年並、本ほ…平年よりやや多)

【育苗ほ】

- ・6月に多発が確認されたが、その後、発生は減少し、平年並で推移した。

【本ほ】

- ・10月に発生が確認され、一部ほ場で12月まで平年よりやや多発生で推移した。その後、発生は減少したが、3月以降再び一部ほ場で増加が確認された。

(b) 原因解析

【育苗ほ】

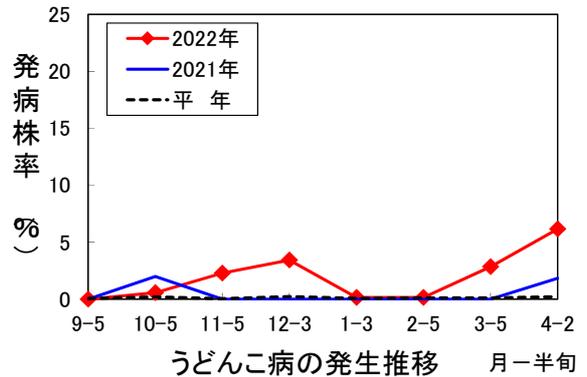
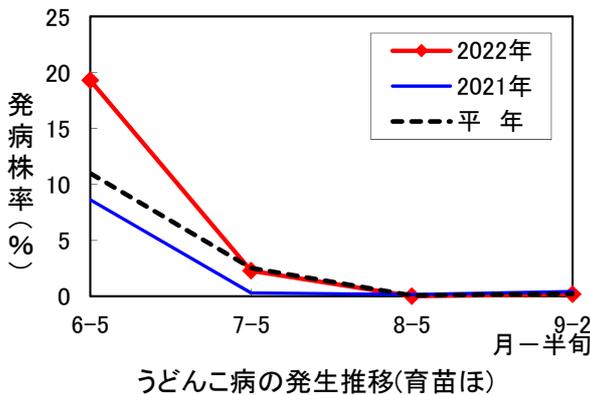
- ・防除の不徹底。
- ・7月以降の高温傾向。

【本ほ】

- ・苗からの持ち込み。
- ・11月の高温傾向。
- ・防除の不徹底。

(c) 防除指導

- ・7月以降の発生予測で、発病葉・発病果の除去、換気等について指導した。また、多発ほ場発生に伴い、発生予測第4号(令和4年6月30日発出)及び発生予測第10号(令和4年12月20日発出)で、防除を徹底するよう別途注意喚起した。



c 炭疽病

(a) 発生経過（発生量：育苗ほ… 平年よりやや多、本ほ… 平年よりやや多）

【育苗ほ】

- ・ 7月に発生が確認された。8月に平年よりやや多発したが、7月には平年並みの発生となった。

【本ほ】

- ・ 本ほでは9月に発生が確認された。一部ほ場で4月まで多発したが、全体的には並発生で推移した。

(b) 原因解析

【育苗ほ】

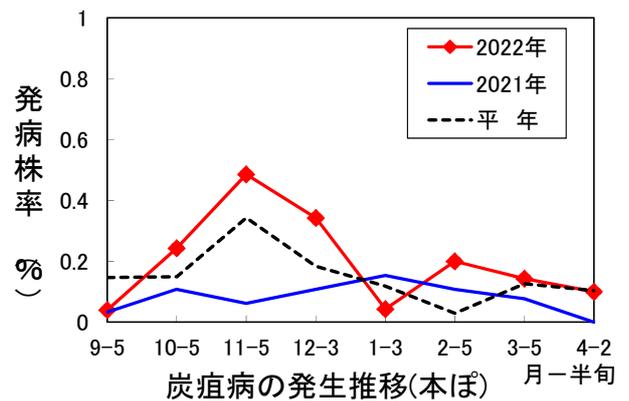
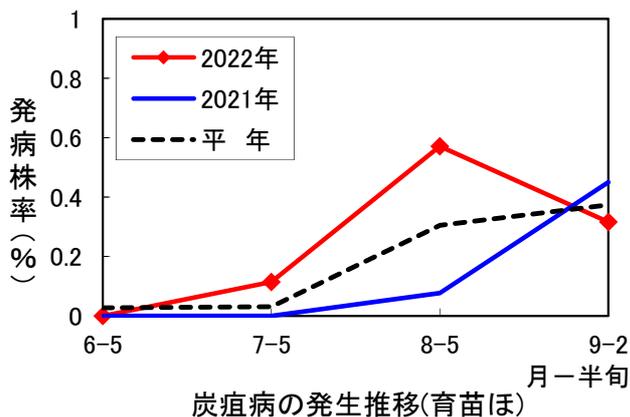
- ・ 8月の高温傾向及び多雨

【本ほ】

- ・ 苗からの持ち込み
- ・ 11月の高温傾向

(c) 防除指導

- ・ 7～11月にかけて発生予測で、発病株や周辺株の抜き取りや密植を避ける等について指導を行った。
- ・ 技術情報第13号(令和5年2月27日発出)にて、親株の炭疽病潜在感染状況の周知および防除を徹底するよう注意喚起した。



d ハダニ類

(a) 発生経過（発生量：育苗ほ… 平年並、本ほ… 平年よりやや少）

【育苗ほ】

- ・ 6月に発生が確認され、8月まで平年並の発生で推移した。その後、9月に多発した。発生は、ほ場間差大きかった。

【本ほ】

- ・ 本ほでは9月に発生が確認され、一部ほ場で多発が確認されたものの、8月まで平年並の発生で推移した。その後、発生は減少し、4月には平年より少発生となった。発生は、ほ場間差が大きかった。

(b) 原因解析

【育苗ほ】

- ・ 初期防除の遅れ。

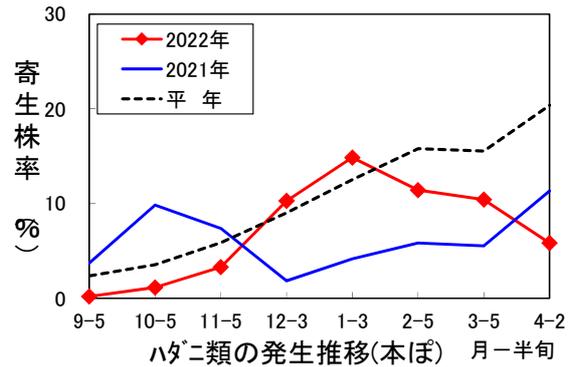
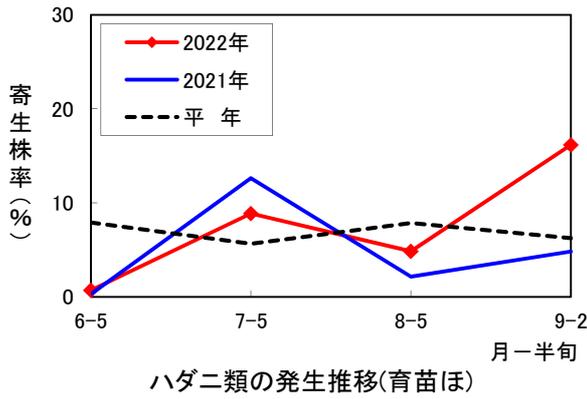
【本ほ】

- ・ 苗からの持ち込み。
- ・ 11月の高温傾向。
- ・ 天敵利用および薬剤防除の徹底

(c) 防除指導

- ・ 7月以降の定期予測で、除草や発生初期の防除、天敵の利用等について指導した。また、

多発ほ場の発生に伴い、発生予報第10号(令和4年12月20日発出)及び発生予報第12号(令和5年3月1日発出)で、防除を徹底するよう注意喚起した。



e その他の病害虫

	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
育苗ほ	萎黄病	平年：やや遅 前年：－	平年：並 前年：－	・一部ほ場で7月のみ発生が確認された。(前年発生なし)	・防除の徹底
	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	・一部ほ場で6月に多発が確認された。7月に発生が減少したものの、その後は平年より多発傾向で推移した。	・期間を通じた高温傾向 ・防除の不徹底
	オオタバコガ	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	・一部ほ場で8月のみ発生が確認された。(前年発生なし)	・防除の徹底
	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：早	平年：並 前年：並	・一部ほ場で6月に発生が確認され、平年並の発生で推移した。	・防除の徹底
	シロイチモジヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・本年発生は確認されなかった。	・防除の徹底。
	チョウ目被害	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	・6月に発生が確認され、8月まで被害が増加した。その後、9月に平年並の発生となった。	・期間を通じた高温傾向
	コナジラミ類	平年：－ 前年：並	平年：－ 前年：並	・一部ほ場で6月に多発が確認されたものの、その後、発生量は減少し、9月には前年並となった(2015年より調査開始のため、平年値なし)。	・期間を通じた高温傾向 ・防除の徹底
本ほ	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・本年発生は確認されなかった。	・防除の徹底
	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・本年発生は確認されなかった。	・防除の徹底
	アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	・9月に発生が確認された。1月まで平年並で推移していたが、1月以降一部ほ場で増加し、4月にはやや多発生となった。発生は地域間差が大きかった。	・防除の不徹底 ・2月以降の高温傾向

	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
本 ぽ	アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	・10月に発生が確認された。1月まで平年並で推移していたが、2月以降増加し、4月にはやや多発生となった。発生は地域間差が大きかった。	・防除の不徹底。 ・2月以降の高温傾向。
	オオタバコガ	平年：やや遅 前年：並	平年：並 前年：並	・一部ほ場で10月のみ発生が確認された。	・防除の徹底。
	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・9月に確認され、平年並の発生で推移した。	・防除の徹底。
	シロイチモジヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・一部ほ場で11月のみ発生が確認された(調査開始時から前年まで発生なし)。	・防除の徹底。
	チョウ目	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・9月に発生が確認され、平年並の発生で推移した。	・防除の徹底。
	コナジラミ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	・9月に発生が確認された。2月まで平年並で推移していたが、3月以降増加し、4月にはやや多発生となった。発生には地域間差が見られた。	・防除の不徹底。 ・2月以降の高温傾向。

(イ) 冬春トマト (令和4(2022)年10月～令和5(2023)年4月)

病害虫名	発生経過の概要	発生要因の解析
疫病	・期間を通して発生はみられなかった。	・防除の徹底。
灰色かび病	・一部ほ場において1月より発生がみられ、4月に発病果率が高くなった。	・換気、暖房機による湿度コントロールの不徹底。 ・防除の不徹底。
葉かび病	・期間を通して発生は少なかった。	・抵抗性品種の作付け。
すすかび病	・10～11月に発生がみられ、3月に一部ほ場で多発した。	・防除の不徹底。
黄化葉巻病	・期間を通して発生はみられなかった。	・防虫ネットによるタバココナジラミの侵入防止。 ・防除の徹底。
アブラムシ類	・期間を通して発生はみられなかった。	・防除の徹底。 ・防虫ネットの利用。
ハモグリバエ類	・期間を通して発生はみられなかった。	・防除の徹底。 ・防虫ネットの利用。
コナジラミ類	・期間を通して発生がみられ、一部のほ場では11月及び4月に多発した。	・侵入防止対策の不徹底。 ・防除の不徹底。

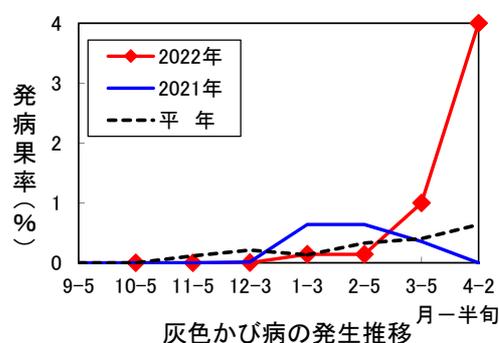
※本年より調査開始のため、平年値、前年値無し

(ウ) 冬春ナス (令和4(2022)年9月～令和5(2023)年4月)

a 灰色かび病

(a) 発生経過 (発生量：平年より多)

- ・1月に発生が認められ、2月までは平年並みの低い発生率であったが、3月以降増加し、平年より多発となった。



(b) 原因解析

- ・ 3月以降、最低気温が平年より高温傾向となり、ハウス内が高湿度となりやすく、多発環境となった。

(c) 防除指導

- ・ 定期予報で、ハウスの換気、薬剤散布等について指導した。

b すすかび病

(a) 発生経過（発生量：平年よりやや多）

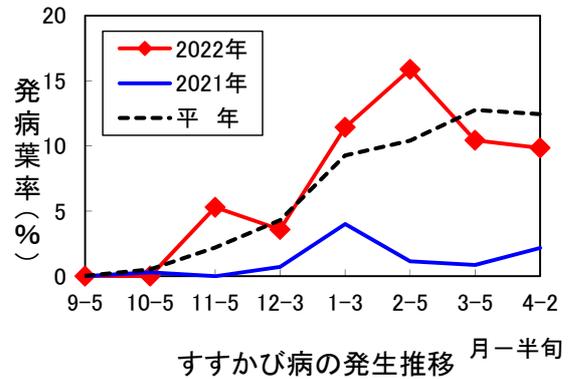
- ・ 11月から発生がみられ、平年並み～多で推移した。特に1月、2月の発生が多くなった。

(b) 原因解析

- ・ 初期防除の不徹底。
- ・ 着果負担による樹勢低下。

(c) 防除指導

- ・ 定期予報で、適正な肥培管理、初期防除の徹底について指導した。



c ミナミキイロアザミウマ

(a) 発生経過（発生量：平年より少）

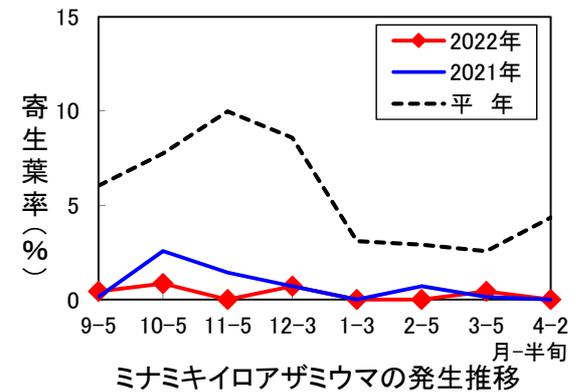
- ・ 一部のほ場で発生が認められたが、多発は無かった。

(b) 原因解析

- ・ 天敵の利用。
- ・ 防虫ネットの利用。

(c) 防除指導

- ・ 定期予報で、薬剤防除、天敵利用時の注意点について指導した。



d その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：多	・ 11月から発生が認められ、一部ほ場で11月、12月、4月に多発した。	・ 防除の不徹底。
ダニ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	・ 9月、10月に一部ほ場で発生したが、多発しなかった。	・ 防除の不徹底。
アブラムシ類	平年：並 前年：－	平年：やや多 前年：多	・ 10月、3月に一部ほ場で平年よりやや多く発生した。	・ 防除の不徹底。
ハモグリバエ類	平年：並 前年：早	平年：やや多 前年：やや多	・ 10月、11月、3月に発生し、平年よりやや多く推移した。	・ 防除の不徹底。
コナジラミ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	・ 期間を通じ発生がみられ、特に9月～12月は平年よりやや多で推移した。	・ 9月～11月の高温。 ・ 侵入防止の不徹底

(エ) 冬キャベツ（令和5（2023）年10月～令和6（2024）年2月）

a 菌核病

(a) 発生経過（発生量：平年並）

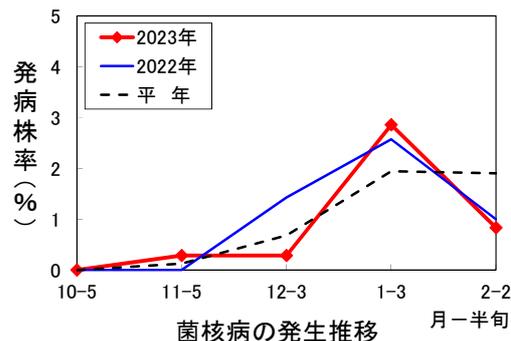
- ・10月に発生が確認された。1月に発生が増加したが、2月に減少した。

(b) 原因解析

- ・1月の高温傾向。
- ・防除の徹底。

(c) 防除指導

- ・11月以降の定期予報で、予防散布の実施や発病株の除去等について指導した。



b コナガ

(a) 発生経過（発生量：並）

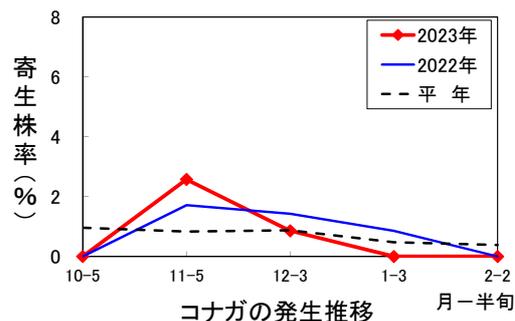
- ・11月に一部ほ場で多発が確認されたが、その後減少し、1月以降発生は見られなかった。

(b) 原因解析

- ・防除の徹底。

(c) 防除指導

- ・11月以降の定期予報で、初期防除の徹底や薬剤ローテーション散布等について指導した。



c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
黒腐病	平年：遅 前年：－	平年：少 前年：－	・一部ほ場で2月のみ発生が確認された。（前年発生なし）	・防除の徹底
軟腐病	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	・一部ほ場で11～12月に発生が確認されたが、1月以降発生は見られなかった。（前年発生なし）	・防除の徹底
べと病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・本年発生は確認されなかった。	・防除の徹底
アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	・10月に発生が確認され、一部ほ場で増加したが、1月以降発生量が減少した。	・防除の徹底
モンシロチョウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・10月に一部ほ場で発生が確認されたが、その後減少した。	・防除の徹底
ハスモンヨトウ	平年：並 前年：－	平年：並 前年：－	・10月に発生が確認され、一部ほ場で増加したが、1月以降発生量が減少した。（前年発生なし）	・防除の徹底
オオタバコガ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・10月に発生が確認され、1月まで一部ほ場で見られたが、全体として平年並で推移した。	・防除の徹底
シロイチモジヨトウ	平年：並 前年：－	平年：並 前年：－	・11月のみ一部ほ場で発生が確認された。（前年発生なし）	・防除の徹底
ウワバ類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・本年発生は確認されなかった。	・防除の徹底
テンサイシストセンチュウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・本年発生は確認されなかった（2023年より調査開始のため、前年値、平年値なし）。	－

(オ) 冬レタス¹⁾ (令和5(2023)年10月～令和6(2024)年2月)

注1) 令和2年まで玉レタス、令和2年以降リーフレタスを調査。平年値は両方を含む過去10年間の平均に基づく。

a 灰色かび病

(a) 発生経過 (発生量: 平年よりやや少)

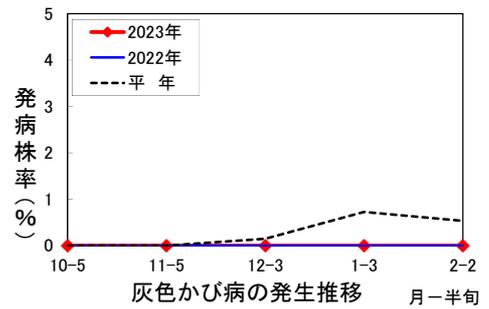
- ・本年発生は確認されなかった。

(b) 原因解析

- ・防除の徹底

(c) 防除指導

- ・1月以降の定期予報で、発病株の除去やトンネル被覆後の栽培管理における注意点等について指導した。



b 菌核病

(a) 発生経過 (発生量: 平年並)

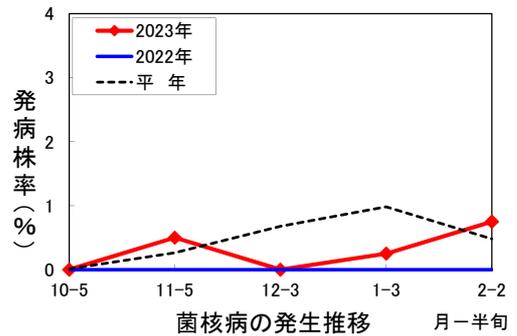
- ・11月に発生が確認され、2月まで一部ほ場で発生が見られたが、全体として平年並みで推移した。

(b) 原因解析

- ・防除の徹底

(c) 防除指導

- ・12月以降の定期予報で、予防散布の実施や発病株の除去等について指導した。



c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
アブラムシ類	平年: - 前年: -	平年: - 前年: -	・本年発生は確認されなかった。	・防除の徹底
ハスモンヨトウ	平年: 並 前年: -	平年: 並 前年: -	・一部ほ場で10月のみ発生が確認された。(前年発生なし)	・防除の徹底
オオタバコガ	平年: - 前年: -	平年: - 前年: -	・本年発生は確認されなかった。	・防除の徹底
シロイチモジヨトウ	平年: - 前年: -	平年: - 前年: -	・本年発生は確認されなかった。	・防除の徹底

(カ) 野菜共通 (令和5(2023)年6月～12月)

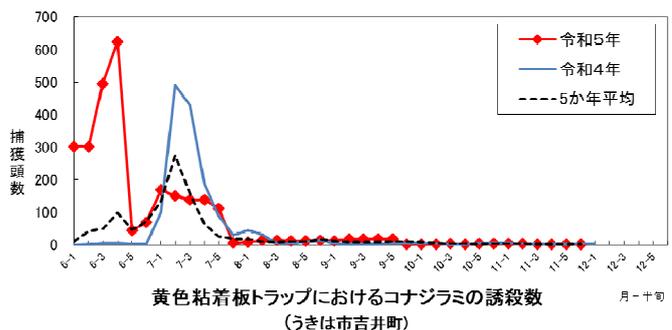
a コナジラミ類

(a) 発生経過

- ・冬春ナスでの発生量は、平年並だった。
- ・トマトほ場トラップでの捕獲頭数は、うきは市では6月にピークがあり、平年より早く多くなった。筑後市では7月中旬をピークとして全期間で前年より多く捕獲された。筑紫野市では7月上旬及び9月中旬のピーク以外は平年・前年より少なく推移した。
- ・うきは市のトマトほ場では黄化葉巻病の発生が多かった。

(b) 原因解析

- ・うきは市、筑後市での捕獲頭数の増加は、ハウス内でのコナジラミ防除が徹底できていなかったことによると考えられる。



(c) 防除指導

- ・定期予察情報にてトラップでの捕殺虫数及び冬春トマトでの発生量を基に、注意喚起を行った。
- ・アスパラガスにおけるコナジラミ類の農薬による防除が不十分となっている事例があることから、薬剤感受性試験を実施し、結果を指導機関に提供した。

b その他の病害虫（令和5(2023)年春～秋）

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
ハスモンヨトウ	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：並 前年：やや多	・フェロモントラップでの誘殺ピークは、地区によって異なるが9月上旬と9月下旬に確認された。 ・野菜類では9月以降、被害が多く見られた。	・8月、9月の少雨
オオタバコガ	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：並 前年：並	・フェロモントラップでの誘殺ピークは、地区によってばらつきが大きい 9月～10月にあり、11月に増加した地区もあった。 ・野菜類では大きな被害は見られなかった。	・8月、9月の少雨 ・9月、10月の高温

エ 特用作物

(ア) 茶（令和5(2023)年4～9月）

a 炭疽病

(a) 発生経過（発生量：多）

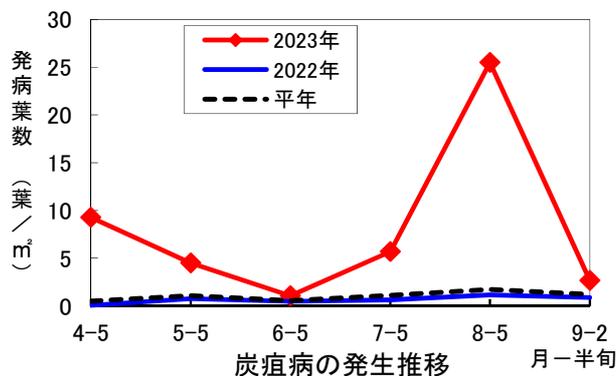
- ・発生は、4月5半旬の調査開始時期からみられ、8月5半旬の調査では特に高い発病葉率が確認された。

(b) 原因の解析

- ・5～6月は多雨傾向であった。この時期は収穫期で樹体が傷み、防除が行えないので感染が拡大した可能性がある。
- ・発病葉率に比して、生産物の減収・品質低下は軽微であった。

(c) 防除指導

- ・定期予報により、罹病枝及び罹病果の除去、適正な肥培管理、予防に重点をおいた定期防除の徹底について指導した。



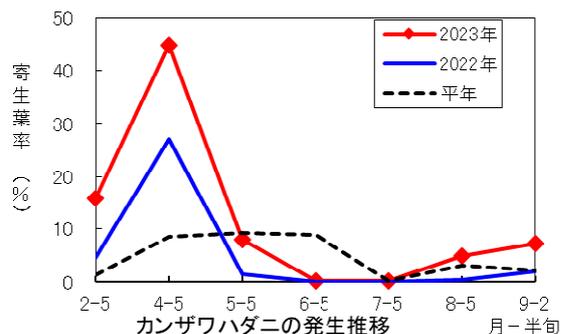
b カンザワハダニ

(a) 発生経過（発生時期：並、発生量：多）

- ・越冬虫数は多く、4月5半旬には非常に多くの寄生が確認された。以降は防除が徹底され平年並みの発生程度で推移したが、一部の園では夏季もやや多い発生がみられた。

(b) 原因の解析

- ・昨年度末の高密度の寄生、及び暖冬による越冬量の増とその後の増殖。
- ・越冬量は多かったが、4月以降の防除及び6～7月の枝の更新により、ハダニの寄生が抑制された。



(c) 防除指導

- ・定期予報により発生状況を周知し、適期防除 やローテーション散布について指導した。

c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
もち病	平年：遅 前年：－ (前年発生なし)	平年：少 前年：並	・調査期間には見られなかった。	・適期防除。
チャノコカク モンハマキ	平年：並 前年：遅	平年：並 前年：並	・フェロモントラップにおける誘殺ピークは、平年並で前年より遅かった。 ・巻葉数は、8月5半旬は平年よりやや多かったが、通年として平年並であった。	・春季から夏季にかけて高温傾向。
チャノホソガ	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：やや多	・8月までは平年より少なかったが、9月2半旬調査では多発生となった。	・夏季の高温少雨傾向。
チャノミドリ ヒメヨコバイ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	・6月までは平年並の発生で、以降はやや少なくて推移した。	・適期防除。
チャノキイロ アザミウマ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・7月の発生ピークではやや多い発生がみられたが、他の時期ではやや少ない発生となった。	・春季から夏季にかけて高温傾向。 ・適期防除。
チャハマキ	平年：並 前年：やや遅	(平年：多) (前年：多)	・フェロモントラップにおける誘殺ピークは、5月3半旬であった。	※調査地点変更のため、発生量や発生経過の解析不能。
チャトゲコナ ジラミ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	・発生消長は平年より遅く、発生量は平年並であった。	・夏季の高温少雨傾向。 ・天敵の発生。

(2) 主要病害虫の発生面積及び防除面積（令和5年度）

作物名	作付面積 (ha)	病害虫名	程度別発生面積 (ha)					防除面積 (ha)	
			甚	多	中	少	計	実防除	延防除
普通期 水稻	33,400	苗立枯病	0	0	0	0	0	26,568	26,568
		葉いもち	0	759	1,518	19,736	22,013	33,400	33,400
		穂いもち	0	-	759	11,386	12,145	33,400	33,400
		紋枯病	0	759	3,036	18,218	22,013	33,400	33,400
		白葉枯病	0	0	0	0	0	29,605	29,605
		ばか苗病	0	0	759	1,518	2,277	23,531	23,531
		イネシンガレセンチュウ	0	0	0	6,073	6,073	30,363	30,363
		もみ枯細菌病	0	0	0	759	759	33,400	33,400
		ごま葉枯病	0	0	1,518	4,555	6,073	33,400	33,400
		稲こうじ病	0	0	0	2,277	2,277	16,329	16,329
		ニカメイガ	0	0	0	0	0	33,400	33,400
		セジロウンカ	0	0	0	28,845	28,845	33,400	83,500
		トビロウンカ	0	0	0	9,868	9,868	33,400	83,500
		ヒメトビウンカ	0	0	759	32,641	33,400	33,400	83,500
		ツマグロヨコバイ	0	0	1,518	29,605	31,123	33,400	83,500
		イネドロオイムシ	0	0	0	0	0	29,605	29,605
		イネクロカメムシ	0	0	0	759	759	33,400	50,100
		斑点米カメムシ類	759	3,795	8,350	9,109	22,013	33,400	50,100
		フタオビコヤガ	0	0	0	0	0	29,605	29,605
		コブノメイガ	0	0	0	31,123	31,123	33,400	33,400
イネミズゾウムシ	0	0	0	759	759	29,605	29,605		
スクミリンゴガイ	759	759	3,036	4,555	9,109	1,998	1,998		
麦類 (令和4年 11月～5 年6月)	22,180	さび病類	0	1,179	1,179	1,179	3,536	8,872	9,759
		うどんこ病	0	0	0	0	0	21,514	32,271
		赤かび病	0	0	0	7,588	7,588	21,514	32,271
		黒穂病類	0	0	0	0	0	19,962	19,962
		小麦縞萎縮病	0	0	0	0	0	0	0
		大麦縞萎縮病	0	0	0	0	0	0	0
大豆 (令和5 年産)	8,090	さび病	0	0	0	1,348	1,348	0	0
		べと病	2,697	1,348	1,348	2,023	7,416	1,348	2,696
		葉焼病	674	0	0	2,697	3,371	1,348	2,696
		アブラムシ類	0	0	0	0	0	0	0
		ハスモンヨトウ	0	2,697	3,371	2,023	8,090	8,090	20,225
		吸蜜性カメムシ類	0	674	2,023	2,697	5,393	8,090	8,090
		フタスジヒメハムシ	0	1,348	1,348	4,045	6,742	1,348	1,348
かんきつ	1,120	そうか病	0	0	0	407	407	1,120	1,120
		黒点病	0	0	0	509	509	1,120	5,600
		かいよう病	0	0	0	204	204	1,120	2,240
		ミカンハダニ	0	102	102	713	917	1,120	4,480
		チャノキイロアザミウマ	0	0	204	204	408	1,120	1,120
		アブラムシ類	0	0	0	102	102	1,120	2,240
		なし	323	黒斑病	0	0	0	59	59
黒星病	59			29	29	176	293	323	5,814
赤星病	0			0	0	59	59	323	969
ナシヒメシンクイ	0			0	0	117	117	323	1,938
ハマキムシ類	0			0	0	36	36	323	646
ハダニ類	0			0	29	88	117	323	1,292
カメムシ類	0			0	0	117	117	323	646
カイガラムシ類	0			0	0	0	0	323	1,938
アブラムシ類	0			0	0	264	264	323	646
ぶどう	1,030	晩腐病	0	0	0	0	0	1,030	6,180
		褐斑病	0	0	344	686	1,030	1,030	2,060
		黒とう病	0	0	344	686	1,030	1,030	2,060
		べと病	0	0	0	686	686	1,030	2,060
		灰色かび病	0	0	0	0	0	1,030	1,030
		チャノキイロアザミウマ	0	0	0	344	344	1,030	2,060
		かき	1,140	炭そ病	0	0	0	665	665
カキノヘタムシガ	0			0	0	203	203	1,140	3,420
フジコナカイガラムシ	102			0	203	407	712	1,140	6,840
カメムシ類	102			305	203	305	915	1,140	7,980
ハマキムシ類	0			102	102	508	712	1,140	3,420
カキクダアザミウマ	0			0	0	203	203	1,140	2,280
キウイフ ルーツ	292	かいよう病	0	0	0	292	292	876	

作物名	作付面積 (ha)	病害虫名	程度別発生面積 (ha)					防除面積 (ha)	
			甚	多	中	少	計	実防除	延防除
イチゴ (令和4年9月～5年4月)	428	灰色かび病	0	0	0	183	183	428	1,284
		うどんこ病	31	31	0	31	93	428	1,712
		炭そ病	0	0	0	183	183	428	856
		萎黄病	0	0	0	0	0	428	428
		アブラムシ類	0	0	122	183	305	428	1,284
		アザミウマ類	31	61	92	214	398	428	1,712
		コナジラミ類	0	0	0	122	122	428	1,284
		ハダニ類	31	61	0	245	337	428	2,140
		オオタバコガ	0	0	0	61	61	428	856
ハスモンヨトウ	0	0	31	122	153	428	856		
シロイチモジヨトウ	0	0	0	31	31	428	856		
冬春トマト (令和4年10月～5年4月)	116	疫病	0	0	0	0	0	116	696
		灰色かび病	0	0	29	0	29	116	696
		葉かび病	0	0	0	29	29	116	696
		すすかび病	0	0	29	58	87	116	696
		アブラムシ類	0	0	0	0	0	116	696
		コナジラミ類	0	0	58	58	116	116	696
		ハモグリバエ類	0	0	0	0	0	116	348
		黄化葉巻病	0	0	0	0	0	116	696
冬春ナス (令和4年9月～5年4月)	102	うどんこ病	44	15	15	15	89	102	510
		灰色かび病	0	15	15	44	74	102	510
		すすかび病	14	29	15	44	103	102	510
		ミナミキイロアザミウマ	0	0	0	44	44	102	1,020
		コナジラミ類	29	0	15	58	102	102	204
		ハモグリバエ類	0	0	0	58	58	102	102
		アブラムシ類	0	0	0	29	29	102	102
		ハダニ類	0	0	0	29	29	102	102
冬キャベツ (令和5年10月～6年2月)	367	黒腐病	0	0	0	0	0	367	1,101
		菌核病	0	0	52	52	104	367	734
		アブラムシ類	0	0	-	210	210	367	1,101
		タマナギンウワバ	0	0	-	52	52	367	1,101
		モンシロチョウ	0	0	-	105	105	367	1,101
		コナガ	0	0	52	157	209	367	1,101
		オオタバコガ	0	0	52	157	209	367	1,468
		ハスモンヨトウ	0	0	0	0	0	367	1,468
		シロイチモジヨトウ	888	0	0	0	0	367	1,468
冬レタス (令和5年10月～6年2月)	620	灰色かび病	0	0	0	0	0	620	930
		菌核病	0	0	0	465	465	620	930
		アブラムシ類	0	0	0	0	0	620	1,240
		ハスモンヨトウ	0	0	0	155	155	620	1,240
		オオタバコガ	0	0	0	0	0	620	1,240
		シロイチモジヨトウ	0	0	0	0	0	620	1,240
茶	1,440	炭そ病	1,036	0	0	296	1,332	1,440	7,200
		もち病	0	0	0	0	0	1,440	4,320
		チャノコカクモンハマキ	0	148	148	296	592	1,440	5,760
		チャノホソガ	0	148	0	296	444	1,440	4,320
		チャノミドリヒメヨコバイ	0	444	148	848	1,440	1,440	7,200
		カンザワハダニ	444	444	148	148	1,184	1,440	7,200
		チャノキイロアザミウマ	0	0	148	1,184	1,332	1,440	8,640
		チャトゲコナジラミ	888	148	0	0	1,036	1,440	2,880

II 情報の提供実績

令和5年度侵入調査事業計画及び令和5年度指定有害動植物発生予察事業実施計画について（令和5年3月27日4消安第6816号-1）の令和5年度指定有害動植物発生予察事業実施計画2の（4）及び福岡県病害虫発生予察事業実施要領第6に基づき、防除を適期に合理的かつ経済的に行うため、気象状況及び農作物の生育状況等を勘案し、病害虫の発生状況に基づき必要な情報を関係機関等に提供した。

1 情報の種類と発表回数

（1）情報の種類

ア 発生予報：有害動植物の発生予想を定期的に発表するもの。

発表時期及び回数については、農作物、有害動植物の性質等を考慮の上、防除に有効に利用されるよう定めるものとする。

記載事項は、有害動植物名、有害動植物名の発生時期、発生面積、発生程度、発生地域及びそれらの平年比、前年比、予報の根拠の概要、防除上注意すべき事項（防除の要否、回数、防除時期、使用薬剤等）、その他必要な事項とする。

イ 警報：重要な有害動植物が大発生することが予想され、かつ、早急に防除措置を講ずる必要が認められる場合に発表するもの。

記載事項は、有害動植物名、発生の予想される地域及び時期、発生程度、防除時期及び防除法、その他必要な事項とする。

ウ 注意報：警報を発表するほどではないが、重要な有害動植物が多発生することが予想され、かつ、早めに防除措置を講ずる必要が認められる場合に発表するもの。

記載事項は、有害動植物名、発生の予想される地域及び時期、発生程度、防除時期及び防除法、その他必要な事項とする。

エ 特殊報：新規な有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発生消長に特異的な現象が認められた場合に発表するもの。

記載に当たっては、その内容により問題の重要性、意義等につき解説を加えるよう配慮するものとする。

オ 速報：有害動植物の発生消長に著しい変化があると予想され、又は発生消長を速やかに周知する必要が認められた場合に発表するもの。

記載事項については、その内容について必要な事項とする。

カ 技術情報：有害動植物の発生状況や防除の情報について、病害虫防除所長が必要と認めた場合に発表するもの。

記載事項については、その内容について必要な事項とする。

（2）発表回数 確認

種類	令和5年度	(前年度)
発生予報	12	(12)
警報	0	(0)
注意報	1	(2)
特殊報	3	(3)
速報	1	(1)
技術情報	12	(15)
合計	29	(33)

2 情報の発表状況

(1) 発生予報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	3月30日	かんきつ なし 冬春イチゴ	そうか病、かいよう病、ミカンハダニ 黒星病
第2号	4月28日	冬春ナス かんきつ なし かき 果樹共通 茶	灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ そうか病、ミカンハダニ 黒星病、赤星病 フジコナカイガラムシ チャバネアオカメムシ カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマ、 チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第3号	6月1日	かんきつ なし かき 果樹共通 茶	そうか病、ミカンハダニ 黒星病、ハダニ類 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類 果樹カメムシ類 炭疽病、もち病、カンザワハダニ、 チャノコカクモンハマキ、チャノキイロアザミウマ、 チャトゲコナジラミ、チャノミドリヒメヨコバイ
第4号	6月30日	水稻（普通 期） かんきつ なし かき 果樹共通 イチゴ（育 苗期） 茶	セジロウンカ、トビイロウンカ 黒点病、かいよう病、ミカンハダニ 黒星病、ナシヒメシンクイ、ハダニ類 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ） うどんこ病、炭疽病、ハダニ類 炭疽病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキ チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、 チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第5号	8月2日	水稻（普通 期） 大豆 かんきつ なし かき 果樹共通 イチゴ（育 苗期） 野菜共通 茶	いもち病、セジロウンカ、トビイロウンカ、コブノメイガ ハスモンヨトウ 黒点病、ミカンハダニ 黒星病、ナシヒメシンクイ、ハダニ類 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類、 カキノヘタムシガ 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ） 炭疽病、ハダニ類 コナジラミ類 炭疽病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキ、 チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、 チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第6号	9月1日	水稻（普通 期） 大豆 かんきつ かき 果樹共通 イチゴ（育 苗期） 野菜共通 茶	いもち病、紋枯病、トビイロウンカ、斑点米カメムシ類 ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類 黒点病、ミカンハダニ 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ） 炭疽病、ハダニ類 ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類 炭疽病、もち病、カンザワハダニ、 チャノコカクモンハマキ、チャノホソガ、 チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、 チャトゲコナジラミ

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第7号	9月29日	大豆 かんきつ かき 果樹共通 イチゴ 冬春ナス 野菜共通	ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類 ミカンハダニ 炭疽病、フジコナカイガラムシ 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ） うどんこ病、炭疽病、ハダニ類 ミナミキイロアザミウマ
第8号	10月30日	イチゴ 冬春ナス 冬キャベツ 野菜共通	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類 うどんこ病、炭疽病、ハダニ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 黒腐病、菌核病、コナガ
第9号	11月29日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類 灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 菌核病
第10号	12月20日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類 灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、うどんこ病、 ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病
第11号	1月23日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類 灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、うどんこ病、 ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病
第12号	2月29日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 茶	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類 灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類、アブラムシ類 灰色かび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ カンザワハダニ

(2) 注意報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	10月30日	野菜類	ハスモンヨトウ

(3) 特殊報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	4月28日	サカキ	サカキブチヒメヨコバイ
第2号	6月30日	スモモ	スモモミハバチ
第3号	9月14日	トマト	トマト立枯病

(4) 速報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	6月14日	水稻	イネ縞葉枯病

(5) 技術情報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	7月14日	水稻	イネカメムシ
第2号	7月14日	水稻	海外飛来性害虫（セジロウンカ、トビイロウンカ）
第3号	9月13日	大豆、野菜類	ハスモンヨトウ
第4号	9月29日	大豆、野菜類	ハスモンヨトウ
第5号	11月10日	トマト	トマトキバガ

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第6号	11月17日	麦類	オオムギ網斑病、シロトビムシ類
第7号	11月27日	キウイフルーツ	キウイフルーツかいよう病（秋冬季防除）
第8号	1月5日	イチゴ	イチゴ炭疽病
第9号	1月30日	キウイフルーツ	キウイフルーツかいよう病（冬春季防除）
第10号	2月27日	果樹全般	果樹カメムシ類
第11号	3月1日	小麦	コムギ黄斑病
第12号	3月7日	麦類	赤かび病

3 情報の提供先

県内関係機関・農業団体・市町村・国の機関等に、ファックス・電子メール・郵送で、また、ホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>）への掲載、X（旧 Twitter）への投稿により、発生予報、注意報、特殊報等の病害虫情報を提供している。

区分	提供先	提供方法及び件数			
		ファックス	電子メール	郵送	計
県	農林水産政策課、食の安全・地産地消課、 団体指導課、園芸振興課、水田農業振興課、 経営技術支援課	—	6	—	6
	農林事務所	—	6	—	6
	農業総合試験場（企画部、資源活用研究 センター、豊前分場、筑後分場、八女分場）	—	5	—	5
	農林事務所普及指導センター	—	10	—	10
	農業大学校	—	1	—	1
	病害虫防除員	—	—	20	20
	計	—	28	20	48
農業 団体等	福岡県農業協同組合中央会	1	—	—	1
	全国農業協同組合連合会福岡県本部 （営農開発部、農産部、園芸部）	3	—	—	3
	全国農業協同組合連合会福岡県本部 （農機資材部）	—	1	—	1
	農業協同組合（農産又は園芸担当課）	18	2	—	20
	農業共済組合（福岡県本部、筑前福岡、筑後川 流域、筑後、筑豊、京築・北九州）	6	—	—	6
	計	28	3	—	31
市町村	市町村（農政担当課）	45	15	—	60
	計	45	15	—	60
国・独法	農林水産省消費・安全局	—	1	—	1
	九州農政局消費・安全部	—	1	—	1
	九州農政局福岡地域センター	1	—	—	1
	門司植物防疫所	1	—	—	1
	(独)九州沖縄農業研究センター	1	—	—	1
	(財)日本植物防疫協会	—	1	—	1
	福岡管区気象台気象防災部（防災調査課）	—	1	—	1
計	3	4	—	7	
合計		76	50	20	146

※ 令和6年3月29日時点の提供先、提供方法及び件数。令和5年度中、時期によって変動あり（FAX送信からメール送信への変更希望があったため）。

4 情報の概要

(1) 注意報

ア 第1号 ハスモンヨトウ

公印省略

5農林試第1991号

令和5年10月30日

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和5年度病虫害発生予察注意報第1号について

このことについて、病虫害発生予察注意報第1号（ハスモンヨトウ）を発表したので送付します。

本年は、9～10月にハスモンヨトウのフェロモントラップ誘殺成虫数の増加が顕著な地域が見られました。また、9月以降、大豆、定植直後のイチゴやキャベツでハスモンヨトウの被害が多く見られました。

向こう1か月の気象予報でも、平年に比べて気温が高いとされており、今後も露地野菜及び施設野菜の被害の多発が懸念されます。また、施設においては発生が長期化しやすいので注意してください。

11月は、野菜にとってハスモンヨトウを含めチョウ目害虫の重要な防除時期です。各ほ場における発生状況に応じて適期防除を心掛けましょう。

注意報第1号

1 対象作物名：野菜類

2 病虫害名：ハスモンヨトウ

3 発生状況

- (1) 9月1半旬の筑後市、行橋市においてハスモンヨトウ成虫のフェロモントラップへの誘殺数が年より多かった。さらに、筑後市では、9月5半旬において平年より非常に高かった（図1）。
- (2) 大豆の9月5半旬調査では、ハスモンヨトウの10株当たり払い落とし幼虫数は6.7頭（平年6.2頭）と多く、発生ほ場率も91.7%（平年61.4%）と、平年より多発していた（図2）。
- (3) キャベツの10月5半旬調査ではハスモンヨトウ寄生株率が2.0%（平年0.5%）、発生ほ場率42.9%（平年18.0%）と高かった（図3）。
- (4) イチゴの10月5半旬調査では、ハスモンヨトウ寄生株率が平年より高く、チョウ目被害株率も平年より高かった（図4、5）。

4 防除上注意すべき事項

- ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生初期の防除に努める。
- イ 薬剤防除は若齢幼虫を対象に実施する。秋冬期は齢期が揃っていないので、複数回防除を行う。
- ウ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。

エ 施設栽培の場合は、ハウスの開口部に防虫ネットを張り、成虫の飛び込みを防止する。
 オ 本年の大豆、野菜類のハスモンヨトウの発生状況については令和5年度発生予察技術情報第3号、第4号でも発表している。

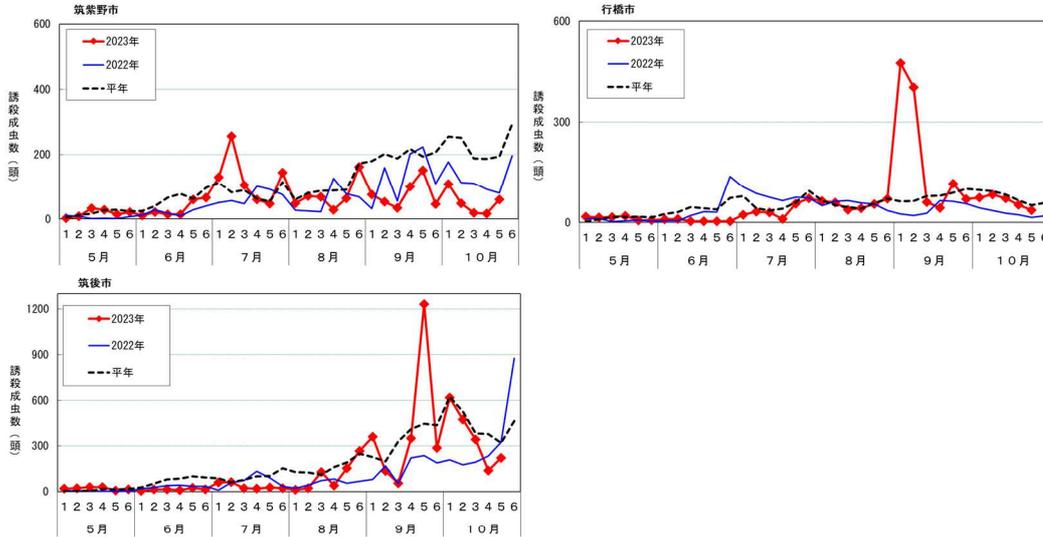


図1 フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺成虫数の推移

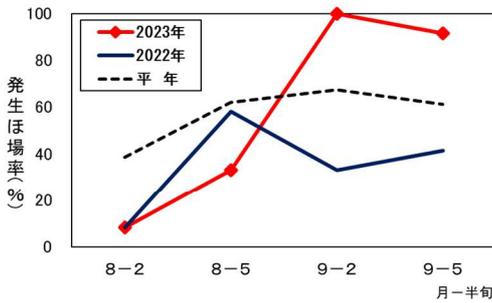


図2 大豆におけるハスモンヨトウ幼虫発生ほ場率

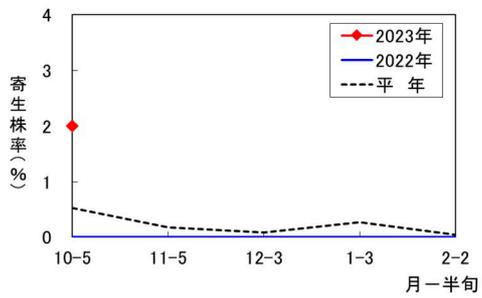


図3 キャベツにおけるハスモンヨトウ寄生株率

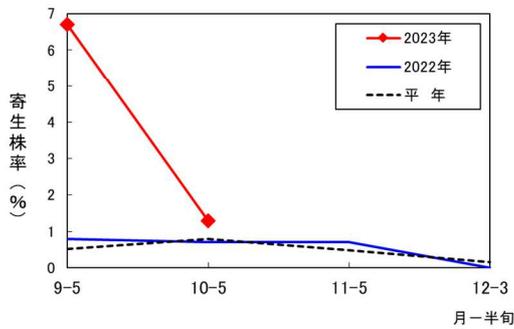


図4 イチゴ本ぼにおけるハスモンヨトウ寄生株率

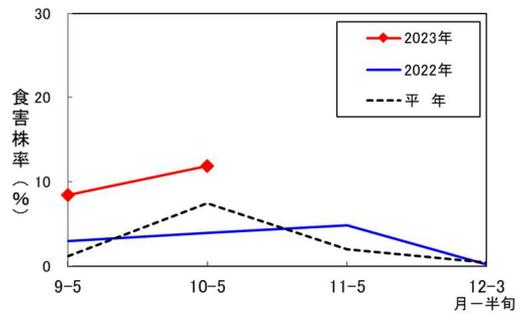


図5 イチゴ本ぼにおけるチョウ目害虫食害株率

(2) 特殊報

ア 第1号 サカキブチヒメヨコバイ

公印省略

5 農林試第 229 号
令和 5 年 4 月 28 日

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 5 年度病虫害発生予察特殊報第 1 号について

このことについて、下記のとおり発表したので送付します。

特殊報第 1 号

1. 害虫名 サカキブチヒメヨコバイ
学名 : *Stictotettix cleyarae*
2. 発生物種 サカキ
3. 発生の経過と概要
県北部のサカキ生産地において、数年前から葉にかすり状の白い斑点（写真 1）が発生しており、近年被害が増加して問題となっていた。
令和 5 年 4 月に生産地から採集した個体について、九州大学でサカキブチヒメヨコバイと特定された（写真 2）。
4. 国内での発生状況
和歌山県、高知県、佐賀県、宮崎県、鹿児島県等で発生が確認されている。
5. 発生生態と被害状況
 - (1) 発生生態
成虫の体色は茶褐色で、体長は概ね 4mm 程度である。不完全変態で、孵化後 5 回脱皮して成虫となる。和歌山県林業試験場が実施した生態調査では、孵化から成虫になるまでの期間は概ね 3~4 週間で、1 年に 3~4 回世代を繰り返すとされている。
生息密度は低く、単独で生息する。
 - (2) 被害状況
成幼虫とも葉裏に寄生し、葉を吸汁加害する。吸汁痕は白く変色し、白点化する。生育条件が良ければ 1 頭でも短期間で激しく加害する。
6. 防除対策
 - (1) 間伐、整枝等
暗く風通しが悪いとヨコバイ類が繁殖しやすくなるため、不用木の間伐や重なり合う枝葉の整枝に努める。

(2) 発消長の把握

防除適期は幼虫期であり、時期は年度、地域によって異なる。幼虫期を予測し適期防除を行うため、黄色粘着トラップ等を設置し、発消長の把握に努める。

(3) 薬剤防除

令和5年4月27日時点で、サカキにおけるサカキブチヒメヨコバイに対して登録のある農薬は、ダイリーグ粒剤、スミチオン乳剤、アグロスリン乳剤の3剤である（登録農薬は、農林水産省の農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/> 等を参照）。



写真1 かすり状の白い斑点が多発した葉



写真2 サカキブチヒメヨコバイの雌成虫

病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。

発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



最新の病害虫発生状況

○Twitter（ツイッター）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

Twitterの本アカウント（福岡県農作物病虫害情報）へのアクセス



イ 第2号 スモモミハバチ

公印省略

5農林試第790号
令和5年6月30日

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和5年度病虫害発生予察特殊報第2号について

このことについて、下記のとおり発表したので送付します。

特殊報第2号

1. 害虫名 スモモミハバチ
学名: *Monocellicampa pruni* Wei
2. 発生作物 スモモ
3. 発生の経過と概要
令和3年6月に県北部のスモモ生産地において果実に微小な穴が開き、内部を食害している幼虫が確認された(写真1、2、3)。このため翌年晩冬から発生ほ場を調査し、令和5年3月中旬に微小なハチ類の成虫が採取された。これを門司植物防疫所に同定依頼した結果、スモモミハバチと同定された。
4. 国内での発生状況
山口県、広島県、大分県で発生が確認されている。
5. 発生生態と被害
(1) 発生生態
成虫の体長は5~6mmで体色は黒色(写真4)、翅は暗色。雌では触角と脚が暗褐色~黒色だが、雄では黄褐色である。年1化性で、スモモの開花初期に地中から羽化し、花器の萼(がく)に産卵する。ふ化幼虫は果実に食入し、微小な侵入痕を残す(写真2)。食入された果実の多くは肥大が遅れ、後に落果する。落果が目立つのは4~5月である。幼虫は5月上中旬に果実を脱出し、土中で土繭を作って蛹化し、春を待つ。
(2) 被害
寄生によって多くの果実が小さいまま肥大せず、そのほとんどが6月上旬までに落果する。このため春先に開花量が十分なほ場でも収量が年々減少していく。開花時期に防除が行われない場合、被害は年々拡大し、最終的には収穫皆無となる。
6. 防除対策
(1) スモモの開花終了後、直ちにスモモミハバチに登録のある薬剤で防除を行う。



写真1 幼虫が食入した果実（断面）



写真2 微小な侵入孔のある果実



写真3 3齢幼虫の顕微鏡像（体長3～4mm）



写真4 雌成虫（体長5～6mm）
（山口県病害虫防除所より）

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。

発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①



最新の病害虫発生状況

○Twitter（ツイッター）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

Twitterの本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス



ウ 第3号 トマト立枯病

公印省略

5 農林試 1265 号
令和5年9月14日

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和5年度病虫害発生予察特殊報第3号について

このことについて、下記のとおり発表したもので送付します。

特殊報第3号

- 1 害虫名 トマト立枯病
- 2 病原菌 *Fusarium solani-melongenae*(*Haematonectria ipomoeae*)
- 3 発生物 トマト
- 4 発生の経過と概要
令和5年4月、県内の施設トマトほ場で、上位葉が黄化および萎縮し、地際部に褐変症状を呈する株が確認された。地際部の褐変した茎表面には赤橙色の小粒が形成されていた。
病徴部から *Fusarium solani* が分離され、門司植物防疫所に同定を依頼したところ、*Fusarium solani-melongenae* (*Haematonectria ipomoeae*) によるトマト立枯病と確定された。
- 5 国内での発生状況
平成2年に愛知県で初めて確認された後、宮崎県、広島県、三重県、岐阜県、佐賀県で発生が報告されている。
本病菌は、トマト以外にナスやピーマン等で立枯症状を引き起こすことが知られている。
- 6 病徴
葉の黄化や萎れが発生し(図1)、最終的に枯死する。株の地際部には、褐変やひび割れが認められ(図2)、茎の内部は黒褐色に腐敗する。株の地際部や露出根部の罹病部表面に赤橙色の小粒(子のう殻)が形成される場合が多い(図3)。
- 7 病原菌の形態
糸状菌の一種で子のう菌類に分類される。分生子は、楕円～紡錘形で無隔壁の小型分生子(図4)と鎌形で隔壁を有する大型分生子を生じる。子のう殻は赤橙色で、子のう殻中に棍棒状の子のうを形成し、その内部に隔壁を有する子のう胞子を8個形成する(図5)。

8 病原菌の性質

生育適温は 25～30℃で高温多湿条件を好むと考えられる。土壌中の罹病残渣に付着している病原菌が伝染源となり、発病後は形成された分生子や子のう胞子の飛散により、二次伝染が起これると思われる。

9 防除対策

- (1) 令和5年8月現在、本病に対する登録農薬はないため、耕種的防除を行う。
- (2) 定植前に太陽熱利用等による土壌消毒を実施し、土壌中の病原菌密度を低下させる。
- (3) 罹病株は伝染源となる恐れがあるため、ほ場外へ持ち出し適切に処理する。
- (4) 過度なかん水は避けるとともに、ほ場内の排水対策を徹底する。



図1 上位葉の黄化および萎縮



図2 地際部の褐変



図3 地際部表面の子のう殻



図4 小型分生子

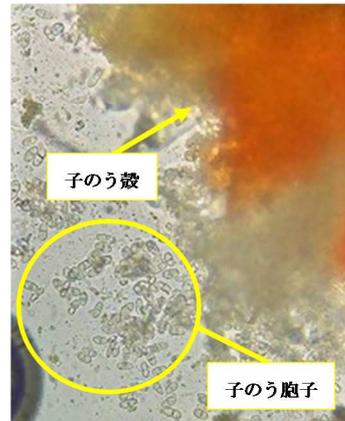


図5 子のう殻・子のう胞子

Ⅲ 国内検疫事業

1 侵入調査事業

植物防疫法（昭和25年5月4日 法律第151号）第十六条の七の2、令和5年度侵入調査事業計画及び令和5年度指定有害動植物発生予察事業実施計画について（令和5年3月27日4消安第6816号-1）の令和5年度侵入調査事業計画1に基づき、侵入警戒有害動植物の侵入を警戒するため、誘殺トラップや現地ほ場での発生状況を調査した。

なお、令和4年に植物防疫法が改正され、侵入調査事業が植物防疫法の中に位置付けられ、発生予察の対象となる侵入警戒有害動植物が指定された。

(1) ミカンコミバエ種群、ウリミバエ、クインスランドミバエ、チチュウカイミバエ

ア 調査場所及び調査地点数

(ア) ミカンコミバエ種群、ウリミバエ、クインスランドミバエ

糸島市（2地点）、筑紫野市、福津市、岡垣町、みやこ町、久留米市、筑後市、柳川市、みやま市
合計：10地点

(イ) チチュウカイミバエ

糸島市、筑紫野市、福津市、みやこ町、久留米市、筑後市、みやま市
合計：7地点

イ 調査期間及び時期

令和5年4月～11月、令和6年3月の2半旬と5半旬

ウ 調査方法

ミカンコミバエ、ウリミバエ及びクインスランドミバエの誘引・殺虫混合剤ユーゲルアD8またはチチュウカイミバエの誘引剤メドフライコールを入れたスタイナー型トラップをそれぞれ設置し、誘殺数を調査した。

エ 調査結果

いずれの地点でも誘殺は確認されなかった。

ミバエ類の侵入警戒調査結果

(単位：頭)

調査場所	調査場所	調査害虫名	4月	4月	5月	5月	6月	6月	7月	7月	8月	8月	9月	9月	10月	10月	11月	11月	3月	3月	合計	
			2半旬	5半旬		2半旬																
糸島市 二丈石崎	糸島市①	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
糸島市 志摩初	糸島市②	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
筑紫野市 吉木	筑紫野市	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福津市 西福岡	福津市①	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福津市 勝浦	福津市②	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岡垣町 糠塚	岡垣町	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
みやこ町 国分	みやこ町	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
筑前町 曾根田	筑前町	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市 新合川	久留米市①	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久留米市 普導寺町与田	久留米市①'	チミ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0	0	0	
		ミカコ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0	0	0	
		ウミ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0	0	0	
筑後市 和泉	筑後市	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
飯塚市 新立岩	飯塚市	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
柳川市 下宮永町	柳川市①	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
柳川市三橋 町今古賀	柳川市①'	チミ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0	0	0	
		ミカコ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0	0	0	
		ウミ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0	0	0	
みやま市 高田町 濃施	みやま市	チミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		ミカコ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ウミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注) チミ：注) 1. チミ：チチュウカイミバエ、ミカコ：ミカンコマバエ種群、ウミ：ウリミバエ
 2. 斜線は未調査。福津市②は、調査場所の施設の解体のため、9月で調査終了。また、令和5年3月調査分からトラップの設置数・設置場所を見直し。

(2) コドリンガ

ア 調査場所及び調査地点数
 筑紫野市、筑後市
 合計：2 地点

イ 調査期間及び時期
 令和5年4月～12月、令和6年3月の2半旬と5半旬（期間内20回調査）

ウ 調査方法

コドリングの誘引剤コドリングコールⅡを用いたジャクソン型トラップをナシ園近くの施設の敷地内に設置し、誘殺数を調査した。

エ 調査結果

コドリングの誘殺は確認されなかった。

コドリングの侵入警戒調査結果

(単位：頭、果)

調査方法	調査場所	4月 2半旬	4月 5半旬	5月 2半旬	5月 5半旬	6月 2半旬	6月 5半旬	7月 2半旬	7月 5半旬	8月 2半旬	8月 5半旬	9月 2半旬	9月 5半旬	10月 2半旬	10月 5半旬	11月 2半旬	11月 5半旬	12月 2半旬	12月 5半旬	3月 2半旬	3月 5半旬	合計
トラップ 調査	八女市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	筑紫野市	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0
	筑後市	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0
	筑前町	-	0	0	0	-	0	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
見取り 調査	朝倉市①	-	0	0	0	-	0	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	朝倉市②	-	0	0	0	-	0	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	うきは市	-	0	0	0	-	0	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	筑後市	-	0	0	0	-	0	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	八女市	-	0	0	0	-	0	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	広川町	-	0	0	0	-	0	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0

注) 1. 「-」は未調査。

2. 令和4年2月21日トラップ設置、令和5年1月5日終了。令和5年2月22日設置。
令和5年2月22日設置分から、トラップの設置数、設置地点を見直し。

(3) トマトキバガ

ア 調査場所および調査地点数

(ア) トラップ調査

福岡市、うきは市、筑後市
合計：3地点

(イ) 見取り調査

福岡市、久留米市、うきは市、柳川市、八女市、筑後市

イ 調査期間及び時期

(ア) トラップ調査

令和5年4月～令和6年3月の2半旬と5半旬（期間内24回調査）

(イ) 見取り調査

令和5年10、11月、令和6年2、3月の2半旬と5半旬、令和5年12月、令和6年1月の3半旬（期間内10回調査）

ウ 調査方法

(ア) トラップ調査

トマトの栽培施設周辺にフェロモントラップを設置し、誘殺された疑義虫は交尾器を確認し同定した。

(イ) 見取り調査

トマト栽培ほ場において、目視で被害葉、被害果の有無を調査した。

エ 調査結果

6月～翌年3月にかけていずれの地区のトラップでも誘殺が確認された。9月までの誘殺数は多くなかったが、10～11月の誘殺が多かった。

見取り調査ではいずれのほ場でも被害の発生は確認されなかった。

令和5年度 トマトキバガフェロモントラップ 誘殺状況

(単位:頭)

調査場所	周辺作物	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		合計
		2半旬	5半旬																							
福岡市	トマト	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	1	16	57	28	9	2	0	0	1	3	1	0	2	123
うきは市	トマト	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	8	4	1	0	0	3	1	0	2	0	1	24
筑後市	トマト	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	3	4	6	1	1	5	2	1	0	2	0	0	29

(4) *Meloidogyne enterolobii*、columnnea latent viroid (CLVd)、pepper chat fruit viroid (PCFVd)、トマト退緑萎縮ウイロイド (TCDVd)、tomato apical stunt viroid (TASVd)、pepino mosaic virus (PepMV)、tomato brown rugose fruit virus (ToBRFV)、tomato leaf curl New Delhi virus (ToLCNDV)、バナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、ジャガイモやせいもウイロイド (PSTVd)、カンキツネモグリセンチュウ、tomato mottle mosaic virus (ToMMV)

ア 調査場所および調査地点数

(ア) tomato mottle mosaic virus (ToMMV) を除く 12 病害虫

筑後市、柳川市

合計：2 地点

(イ) tomato mottle mosaic virus (ToMMV)

久留米市、柳川市、筑後市

合計：3 地点

イ 調査期間及び時期

令和5年12月3半旬に1回調査

ウ 調査方法

トマト栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果

いずれの病害虫も確認されなかった。

(5) 火傷病菌

年度当初の計画による通常調査に加え、中国で火傷病の発生が確認されたことを受け、緊急調査を実施した。

ア 調査場所及び調査地点数

(ア) 通常調査

朝倉市、筑後市

合計：2 地点

(イ) 緊急調査

八女市、筑後市

合計：2 地点

イ 調査期間及び時期

(ア) 通常調査

令和5年4～7月の5半旬、4月、5月及び8月の2半旬（期間内7回調査）

(イ) 緊急調査

令和5年

ウ 調査方法

ナシ栽培ほ場において、目視で発病の有無を調査した。

エ 調査結果

火傷病の発病樹は確認されなかった。

火傷病の侵入警戒調査結果

(単位：樹)

調査場所	4月 2半旬	4月 5半旬	5月 2半旬	5月 5半旬	6月 5半旬	7月 5半旬	8月 2半旬
筑前町	0	0	0	0	0	0	0
朝倉市①	0	0	0	0	0	0	0
朝倉市②	0	0	0	0	0	0	0
うきは市	0	0	0	0	0	0	0
筑後市	0	0	0	0	0	0	0
八女市	0	0	0	0	0	0	0
広川町	0	0	0	0	0	0	0

(6) カンキツグリーンング病菌、*Spiroplasma citri*、*Xylella fastidiosa*

ア 調査場所及び調査地点数

(ア) カンキツグリーンング病菌

八女市、みやま市

合計：2地点

(イ) *Spiroplasma citri*、*Xylella fastidiosa*

八女市(2地点)、みやま市

合計：3地点

イ 調査期間及び時期

令和5年4月の5半旬(年1回調査)

ウ 調査方法

カンキツ栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果

カンキツグリーンング病の発病、ミカンキジラミの寄生ともに確認されなかった。

(7) イネミイラ穂病菌、イネ条斑細菌病菌、イネクキセンチュウ

ア 調査場所及び調査地点数

遠賀町、東峰村

合計：2地点

イ 調査期間及び時期

令和5年8月の2半旬(年1回調査)

ウ 調査方法

水稲栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果

イネミイラ穂病菌、イネ条斑細菌病菌の発生株及びイネクキセンチュウは、確認されなかった。

(8) テンサイシストセンチュウ

ア 調査場所及び調査地点数

福岡市、宗像市、北九州市

合計：3地点

イ 調査期間及び時期

令和5年11月の5半旬（年1回調査）

ウ 調査方法

キャベツ栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査し、寄生が疑われる株は掘り取って持ち帰り、寄生の有無を調査した。

(9) ヘシアンバエ、*Ramularia collo-cygni*

ア 調査場所及び調査地点数

(ア) ヘシアンバエ

糸島市、久留米市、小郡市、嘉麻市、筑後市、築上町

合計：6地点

(イ) *Ramularia collo-cygni*

糸島市、久留米市、筑後市、築上町

合計：4地点

イ 調査期間及び時期

令和5年4月の5半旬（年1回調査）

ウ 調査方法

小麦栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果

ヘシアンバエ、*Ramularia collo-cygni* ともに確認されなかった。

(10) スイカ果実汚斑細菌病菌

ア 調査場所及び調査地点数

福岡市、北九州市

合計：2地点

イ 調査期間及び時期

令和5年5月、6月（各月1回ずつ調査）

ウ 調査方法

スイカ栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果

スイカ果実汚斑細菌病の発病株は確認されなかった。

スイカ果実汚斑細菌病の侵入警戒調査結果 (単位:株)

調査場所	5月2半旬	6月2半旬	7月2半旬
福岡市	0	0	0
北九州市	0	0	0

(11) インゲンマメ萎凋細菌病菌

ア 調査場所及び調査地点数

宗像市、久留米市、柳川市、築上町
合計：4地点

イ 調査期間及び時期

令和5年8月の2半旬(年1回調査)

ウ 調査方法

大豆栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ インゲンマメ萎凋細菌病菌の発病株は確認されなかった。

(10) ウメ輪紋ウイルス

ア 調査場所及び調査地点数

久留米市 1地点

イ 調査方法

(ア) 見取り調査

5月中旬にウメ輪紋病発生の有無を目視により確認した。

(イ) 疑似症状又は類似症状等の検定

見取り調査において、疑似症状又は類似症状を呈した葉等が確認されなかったため、各地点から5本ずつ選定し、採取した葉について、門司植物防疫所で検定を行った。

ウ 調査結果

ウメ輪紋病の発病樹は確認されなかった。

ウメ輪紋ウイルスの侵入警戒調査結果 (単位:本)

調査場所	調査月日	調査樹種	検定数	(うち疑似症状・類似症状)	陽性数
小郡市	5月18日	ウメ	5	0	0
久留米市①	5月18日	ウメ	5	0	0
久留米市②	5月18日	ウメ	5	0	0
久留米市③	5月18日	ウメ	4	0	0
		アンズ	1	0	0

IV 病害虫防除対策

1 問題となっている病害虫に関する調査

(1) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫検定

ア 目的

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は平成 23 年をピークに低下しているが、早植地帯や常発地等での発生リスクは、依然として高いと考えられる。

平成 20 年には国内の土着個体群とは異なる薬剤感受性を有する海外個体群の飛来が報告されており、防除対策を講じる上で、本種の薬剤感受性の動向には十分に注意を払う必要がある。

このことから県内の保毒虫率を明らかにし、今後の防除対策の基礎資料とする。

イ 調査方法

(ア) 採集時期：5 月上～中旬

(イ) 採集場所：県内 14 地点の小麦ほ場

(ウ) 検定方法：簡易エライザ法（小麦穂より採集した第 1 世代幼虫を検定）

ウ 結果の概要

平均保毒虫率は 0.1% で、前年に引き続き低水準で推移している。

表 検定地点別のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率及び保毒虫確認ほ場率

検定地点	検定虫数 (頭)	保毒虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
筑紫野市山家	94	0	0
宗像市朝町	94	0	0
糸島市二丈松末	94	1	1.1
久留米市宮ノ陣町	94	0	0
小郡市力武	94	0	0
うきは市浮羽町山北	94	0	0
朝倉市馬田	94	0	0
筑前町栗田	94	0	0
嘉麻市中益	94	0	0
糸田町嵐ヶ池	94	0	0
柳川市大浜町	40	0	0
筑後市若菜	94	0	0
大川市諸富	94	0	0
築上町権田	94	0	0
平均保毒虫率 (%)			0.1
保毒虫確認ほ場率 (%)			7.1

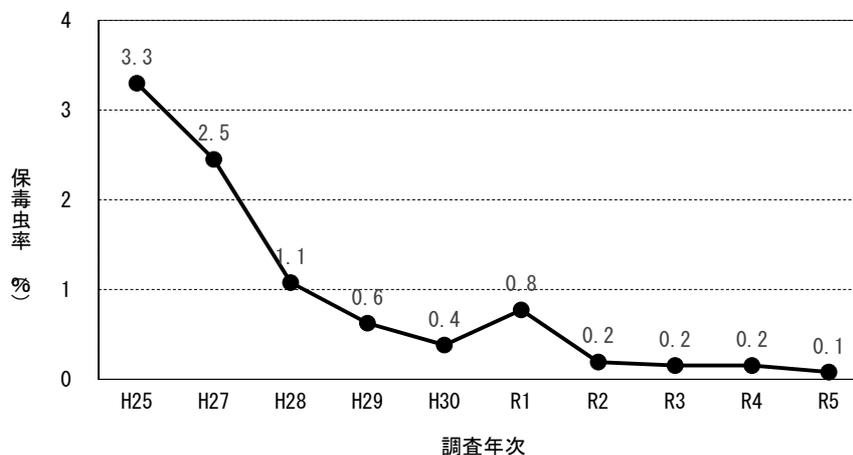


図 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移
(検定対象：県内 14 地点の小麦ほ場で採集した第一世代幼虫)
注) H26年は欠測のためデータなし

(2) 大豆におけるハスモンヨトウの薬剤感受性検定

ア 目的

本県の令和5年産大豆において、ハスモンヨトウの多発が問題となった。そこで、薬剤の感受性を調査するため、ハスモンヨトウに対する主要な薬剤の感受性検定を行った。

イ 検定方法

(ア) 採集時期：9月、10月

(イ) 採集場所：県内6地域の大豆ほ場

(ウ) 供試虫：ハスモンヨトウの2齢から3齢幼虫

(人工飼料を用いて飼育し得られた次世代幼虫)

(エ) 供試薬剤

プレバソンフロアブル、フェニックスフロアブル、ベネビアOD、プレオフロアブル、グレーシア乳剤

無処理区は水道水を用いた。

(オ) 検定方法

①検定容器は直径約9.4cm、高さ4cmのプラスチック容器を用いた。ろ紙の上にアルミホイル(6cm×6cm)を敷いた。

②厚さ約5mmに切断したインセクタLFSを所定濃度に調製した薬液に1分間つけ、風乾した。

③風乾したインセクタLFSを上記のプラスチック容器に、幼虫を1シャーレ当たり約10頭接種した。

④接種120時間後(5日後)に生死を判定し、補正死虫率を求めた。試験は3反復行った。

$$\text{補正死虫率(\%)} = [(\text{無処理区の生存率} - \text{処理区の生存率}) / \text{無処理区の生存率}] \times 100$$

ウ 検定結果

グレーシア乳剤は、いずれの個体群も感受性が高かった。

プレオフロアブルは、個体群によって感受性の差がみられた。

プレバソンフロアブル、フェニックスフロアブル、ベネビアODは5個体群の死虫率が低く、感受性の低下が疑われた。

大豆におけるハスモンヨトウの薬剤感受性検定結果

供試薬剤 (IRACコード)	処理濃度	補正死虫率 (%)					
		A地点	B地点	C地点	D地点	E地点	F地点
プレバソンフロアブル (28)	2000 倍	36.7	80.0	53.3	63.3	3.3	53.6
フェニックスフロアブル(28)	2000 倍	13.3	73.3	40.0	50.0	0.0	39.3
ベネビア OD(28)	2000 倍	30.0	76.7	60.0	50.0	30.0	28.6
グレーシア乳剤(30)	2000 倍	100	100	100	100	100	100
プレオフロアブル(UN)	2000 倍	30.0	93.3	100	0.0	100	0.0

エ その後の対応

JA全農ふくれんや普及指導センターに検定結果を通知した。また、第103回九州病害虫研究会に口頭発表を行った。

(3) キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統発生拡大への対応

ア 目的

2014年4月下旬、県南部で、県内未発生で他の系統に比べて病原性の高い、キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統(以下、「Psa3」)の発生が確認された。同年中は1市内の限られた1地区のみの発生であったが、翌2015年には、県内の4市1町に発生が拡大し、2019年には5市1

町、2020年には6市1町に拡大した。

Psa3は、感染樹から流出した樹液の風雨による飛散や樹液の付着した剪定器具の使いまわし等により容易に拡大する。感染すると花蕾や結果母枝が枯死し、収量に甚大な被害を及ぼす。

そこで、Psa3の感染地域を把握し、伐採・抜根、枝の切除等の対策に資するため調査を行った。

イ 調査方法

①検定

主に2月から6月にかけて、生産者からJA・普及センターを通じて持ち込まれた発病が疑われる枝や葉について、病斑と疑われる部分からDNA抽出キット等を用いてDNAを抽出し、J.Rees-George et al. (2010)およびBalestra et al. (2013)のPCR法で、かいよう病菌の判定と系統の判別を行った。

②予察調査

2016年に発生が確認され、発病枝の切除で対応した「ヘイワード」の2園を、発生予察調査園に定めて、3～5月に定期的に調査した。

1園につき、5本を調査樹とし、発病葉や発病枝の数を調査した。

ウ 調査結果

①検定

本年は、4月下旬に最初の発症が確認された。

本年の検定では、26検体について調査を行った結果、12検体で陽性となった。陽性となった検体は、全て未発生の園地から採取されたものであり、依然として感染が拡大していると考えられた。

②予察調査

3～5月の調査の際に発病枝・発病葉ともに発生は認められなかった。

エ その後の対応

2014年の発病園に対する対応は、「発病樹と隣接樹を伐採」もしくは「発病園を全伐採」が基本であった。しかし、2014～2016年の試験研究や発病園に対する対応によって得られた知見に基づき、2016年以降は、「ヘイワード」等の比較的かいよう病に強い品種については「発病枝の部分切除」で対応することが多かった。部分切除後の樹で、枝の枯死や葉の褐点症状が生じる場合があったが、樹液の漏出といった収量に影響する重大な被害は生じなかった。

一方、「紅妃(レインボーレッド)」等のかいよう病に弱い品種や雄木については、部分切除で対応しても発病樹の拡大は抑えられないと考えられ、引き続き『発病樹は伐採』、状況によっては『周辺樹も伐採、発病園を全伐採』という対応が基本となる。

(4) かんきつミカンハダニの薬剤感受性検定

ア 目的

かんきつ類の重要害虫であるミカンハダニは比較的薬剤抵抗性が発達しやすく、生産現場では一部の殺ダニ剤について効果の低下が指摘されている。

そこで、対象地区で採取したミカンハダニについて、殺ダニ剤の薬剤抵抗性を調査し、有効な農薬の選択に資するものとする。

イ 検定方法

(ア) 採集時期：11月

(イ) 採集場所：八女市の施設ミカン園

(ウ) 供試薬剤

ダニオーテフロアブル、ダニコングフロアブル、コロマイト水和剤

無処理区は脱イオン水を用いた。

(エ) 検定方法

①検定容器は直径約100mm、高さ約60mmのプラスチックカップを用いた。カップに約35mm径立方体のスポンジを入れ、スポンジの上面直下まで水を入れた。

②無防除のミカンの葉を適度な大きさに切り、直径9cmのろ紙2枚で挟み、葉が乾燥しないよう①のスポンジ上に置いた。葉の表側に重ねるろ紙は、ハダニ接種用に直径2cmの穴

を開け、葉を露出させた。

③採取したミカンハダニの雌成虫を5頭/葉接種し、26℃で静置した。

④2日後、雌成虫を取り除き、産卵数を計数後、ろ紙を外して葉を所定濃度に調製した薬液に浸漬した。

⑤吸水紙で水滴を取り除いた葉を、再度ろ紙で挟み、スポンジ上に戻して26℃で静置した。葉が乾燥しないよう、適宜プラスチックカップに給水した。

⑦10日後、孵化卵数、未孵化卵数、死虫数を計数し、補正死虫率を求めた。試験は6反復行った。

$$\text{補正死虫率(\%)} = [(\text{無処理区の生存率} - \text{処理区の生存率}) / \text{無処理区の生存率}] \times 100$$

ウ 調査結果

ダニオーテフロアブルに対しては感受性が高かった。コロマイト乳剤に対しては、著しい感受性の低下が見られた。

施設ミカンにおけるミカンハダニの薬剤感受性検定結果

供試薬剤名 (IRAC コード)	処理濃度	補正死虫率 (%)
ダニオーテフロアブル (33)	2000 倍	98.6
ダニコングフロアブル (5、UNE)	2000 倍	72.2
コロマイト水和剤 (6)	2000 倍	41.7

エ その後の対応

JA 全農ふくれんの生産対策会議において結果を説明し、普及指導センターや JA を通じて産地へ検定結果を通知した。

(5) イチゴ炭疽病潜在感染株 (親株) 調査

ア 目的

イチゴの巡回調査地点で、親株の炭疽病菌保菌程度を調査し、今後の防除の参考に資する。

イ 調査方法

11月2半旬に県下8地点のほ場の親株から、各20株ずつ複葉を採取し、エタノール浸漬法により以下の手順で調査した。

①検定葉を70%エタノールに浸漬した後、水洗した。

②大型のポリ容器に滅菌水で湿らせたろ紙を敷き、ろ紙上に検定葉を並べて容器を密封し、28℃の恒温で静置した。

③2週間後に検鏡し、炭疽病菌を確認した。

ウ 調査結果

親株の潜在感染株率、潜在感染株確認ほ場率ともに前年並であった。

・潜在感染株率 45.0% (前年 46.7%)

・潜在感染株確認ほ場率 100% (前年 100%)

エ その後の対応

令和5年2月27日付けで技術情報を発表し、今後の防除等について周知を行った。

(6) トマトにおけるタバココナジラミの薬剤感受性検定

ア 目的

近年、施設栽培トマトにおいて、トマト黄化病およびトマト黄化葉巻病の発生が問題となっている。これらのウイルス病の媒介虫であるタバココナジラミの薬剤感受性について、主要な薬剤に対する感受性を検定した。

イ 検定方法

(ア) 採集時期：6月

(イ) 採集場所：県内2産地の施設栽培トマトほ場

(ウ) 供試薬剤

アルバリン顆粒水溶剤、ダブルシューターSE、アフーム乳剤、コルト顆粒水和剤
無処理区は水道水を用いた。

(エ) 検定方法

- ①検定容器は直径約30mmのプラスチックシャーレを用いた。シャーレの底を切り抜いてゴースを張り、側面にコナジラミを挿入するための小さな穴をあけた。
- ②は種約40日後のナス株から採取した葉を所定濃度に調製した薬液につけ、風乾した。
- ③風乾した葉を上記のプラスチックシャーレで挟み、成虫を1シャーレ当たり約10～15頭接種した。
- ④接種72時間後（3日後）に生死を判定し、補正死虫率を求めた。試験は4反復行った。

$$\text{補正死虫率(\%)} = [(\text{無処理区の生存率} - \text{処理区の生存率}) / \text{無処理区の生存率}] \times 100$$

ウ 検定結果

アフーム乳剤に対しては、いずれの個体群も感受性が高かった。

アルバリン顆粒水溶剤及びダブルシューターSE、コルト顆粒水和剤は、採集した個体群によって差がみられ、特にコルト顆粒水和剤は個体群によって著しい感受性の低下が見られた。

トマトにおけるタバココナジラミの薬剤感受性検定結果

供試薬剤（IRACコード）	処理濃度	補正死虫率（%）	
		A地点	B地点
アルバリン顆粒水溶剤（4 A）	2000 倍	95.7	63.9
ダブルシューターSE（5、UNE）	1000 倍	78.3	98.1
アフーム乳剤（6）	2000 倍	90.7	94.4
コルト顆粒水和剤（9 B）	4000 倍	77.8	26.2

エ その後の対応

JA 全農ふくれんの生産対策会議において結果を説明し、普及指導センターや JA を通じて産地へ検定結果を通知した。また、「令和5年度版 病害虫・雑草防除の手引き」に検定結果を登載した。

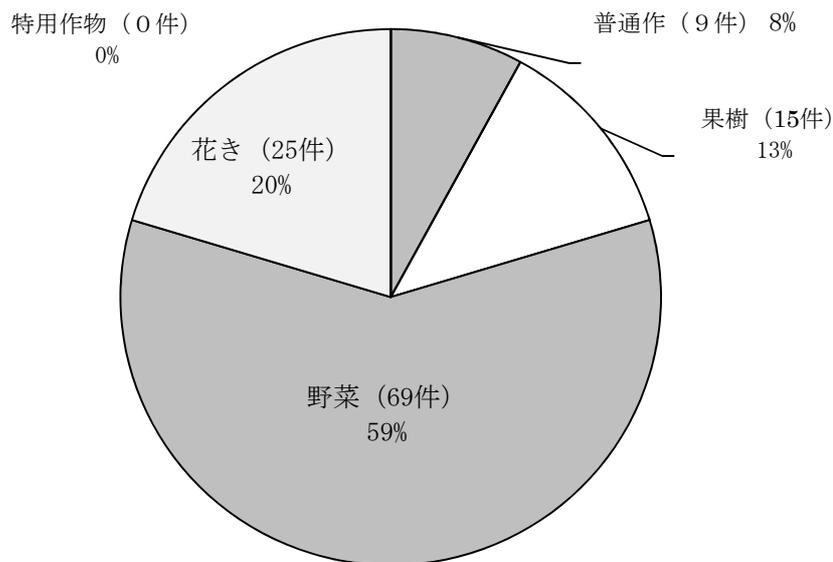
2 病害虫診断

(1) 普及指導センター等からの作物別依頼件数と診断結果

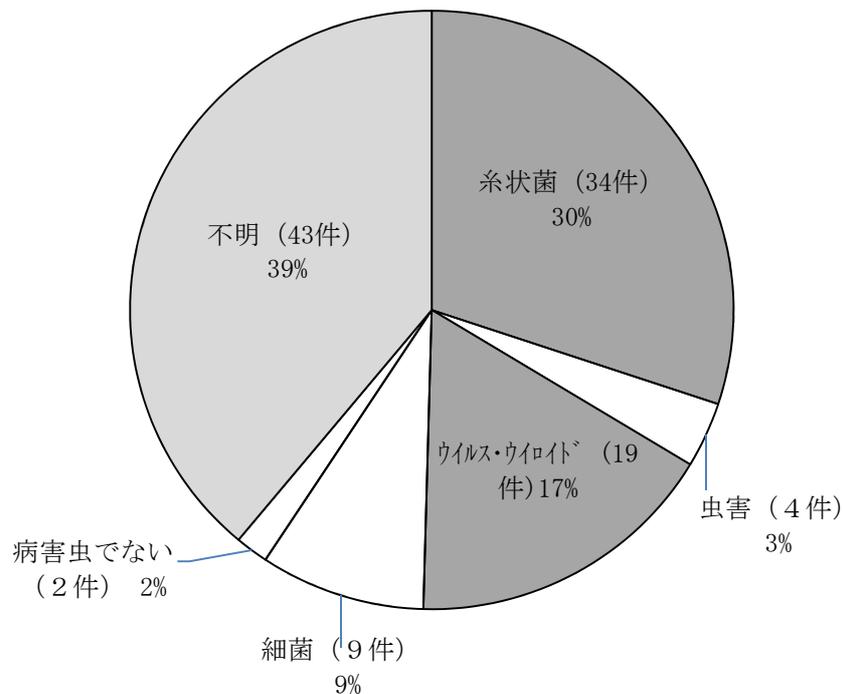
令和5年4月から令和6年3月までの診断依頼件数は、普通作物9件、果樹15件、野菜69件、花き・花木25件の合計118件であった。

作物ごとに主な診断依頼品目をみると、野菜はトマト類(30件)、ナス(11件)、イチゴ(7件)。花き・花木はキク(7件)、トルコギキョウ(6件)。果樹はカキ(3件)、イチジク(2件)、ブドウ(2件)。普通作は水稻(1件)、大豆(5件)、大麦(1件)、サツマイモ(2件)であった。

原因別にみると、病害虫が原因であるものは68件(60%)で、その内訳は、糸状菌(34件)、虫害(4件)、ウイルス・ウィロイド(19件)、細菌(9件)、線虫(2件)であった。また、病害虫でないもの2件、不明43件であった。



病害虫診断依頼(作物別内訳)



病害虫診断依頼(原因別内訳)

令和5年度 植物防疫年報

令和6年10月 発行

編集・発行 福岡県筑紫野市大字吉木 587

福岡県農林業総合試験場病害虫部予察課

福岡県行政資料

分類番号 P A	所属コード 4 7 0 3 7 1 9
登録年度 6	登録番号 0 0 0 2

リサイクル適正

Ⓐ

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。